
再掲：闇の奥の奥に―龍神転生異聞録―

pandi剛種

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

再掲：闇の奥の奥に―龍神転生異聞録―

【Nコード】

N0311BA

【作者名】

pand i 剛種

【あらすじ】

あらすじ：探偵水樹幸一は、大島由々子という女性から依頼を受ける。それは自分の故郷について調べて村で行われている儀式を止めろということらしい。村に入れば待っていたのは多くの人間の死、『異人』と呼ばれるもの達、『六の獣』と暗き者、そしてたった一人の少女。水樹幸一は様々な困難を乗り越えつつ、土着の神の復活を以て暗き者達に立ち向かおうとする。

「神を復活させる、例え何を犠牲にしても、どんなことをして

も、
必ず
「

一話目

七月の七日に二人が死ぬ。

八月の三十日に一人が死んで、神がその腕を広げる。

九月の一日に一人が死んで、最後の一人は薪にくべられる。

拾月の十日は神をたたえる日。数が足りないので新たに一人の人が死んで最初の一人が目覚めます。

十一月はたくさん殺そう。特に二十日がいい。腐った七人を薪にくべ、炎は暗闇に燃え上がる。

たくさん殺した、たくさん殺した。

そして拾二を数えた月の日に花が芽吹き、新たな神が姿を現す。

不気味だった。

探偵をする私の前にやってきた女性は、事務所に入ってくるなりそわそわとした様子でコーヒーテーブルに紙を差し出した。

レインコートと濡れた長い黒髪で顔は見えない。

わかるのは、息が少し荒いと言う事。

焦っている、というよりはなんだか興奮している。

カチリ……カチリ……

彼女の胸元のあたりから聞こえてくる時計の針の音。

時折胸ポケットから取り出す金色の懐中時計を確認しているように、何かよほど急いでいるのだろうか。

コーヒーカップを片手に持っていた私の動きが止まり、視線は紙に釘づけになる。

「……なんでしょうこれ」

紙には上記の事が書かれていて、何やら謎めいているというのが率直な感想。

文字は丁寧な紅いインクを使った筆文字。
顔を近づけ匂えば、微かに漂う鉄の匂い。

「……あなたの血ですか？」

女性は俯いたまま、僅かに首を振るだけで向かいのソファで身体を僅かに震わせる。

「二、三尋ねて良いですか？」

「……はい」

——震えた声は、不安に満ちている。

この女性は今のところ、嘘をついている様子はないと感じる。

「一つ。あなたのお名前と住所をお教えしてほしいのですが」

「大島由々子……と申します。住所は……ありません」

「住所不定ですか」

「は、はい……」

不況が続く日本ではそう珍しいことではない。

まあ興味もあることなので、私は質問を続けてみる事にした。

「もうひとつ。これがどこから届いたものかわかりますか？」

「……」

答えたくなさそうに大島由々子は首を左右に振る。

——言いたくない、なぜ？。

「……最後に一つだけ聞きます。あなたの依頼はなんですか？」

「……お願いが……あります」

「はい」

「——その手紙は、私の故郷から送られてきたものなのです……」

「はあ」

「死んだ父の名前を使って、取り壊したはずの家の住所から来ているのです」

——言ってるじゃないですか。

先程と変わって、焦燥しつつも、すらすらと話し始める様子に、私は戸惑いを覚えつつ、手に持った紙を覗きこむ。

「そこには五人の男が死ぬと書いてあります。もしかしたら私がふ

くまれているのかもしれないのです」

「……由々子さん男じゃないですよね」

「――間違えました、男女限らずなんです」

十一月以降の動向が少し不明だが、概ね五、六人が死ぬことを予告している事になる。

壁に引つけたカレンダーを見れば、今日は雨降る六月。

死人が出るのは来月、か。

「この手紙の文章。内容等々で見覚えはありませんか？ ただの脅迫文にしては妙に凝っていますね」

「……故郷では、神殺しの儀が毎年七月に行われるのです」

「物騒……」

「その文章で、我々村の一族が殺す神様が語る言葉です……おそろくソレにもじって誰かが私を殺そうとしているんです」

「……由々子さんご本人の指定はありませんが」

「……。私の一族は、毎年神に生贄に出されていた一族なのです……」

一族から排出される生贄は、男女。

あまり民俗学は明るい方ではないのだが、私のイメージでは生贄って大概女性のみが差しだされるのではなからうか。

生贄は、あまり本気でやる慣習はそうそうない。

食いぶちを減らすために働き手になりづらい女の子の余りを殺すための口実を作るにすぎない、と私は思っている。

ただ彼女の所はそうではなく、頭のおかしい輩も大勢いるということ。

それだけ土着の信仰が、彼女に重くのしかかっている。

胸の内がぐるぐるといやな感情で渦巻いていた。自然と顔も引きつって、私は笑顔に戻して大島由々子に尋ねた。

「すいません。話を続けましょう」

「はい……探偵さんに頼みたい事は二つあるんです……」

「うん、続けてください」

「一つは、村で何が起きているか調べてほしいのです。……私が行けば、おそらく生贄にされるかもしれません」

本当にされるんだろうか。

この日本に住んでいて、変死はともかく生贄にされて殺されましてなんて人はニュースでは聞いたことも見た事もない。

「もうひとつは？」

「村の人たちを……殺してほしいんです」

私はさすがに顔を引きつらせながら、小さく首を振ると、真剣な表情で私を見つめる大島由々子に告げた。

「残念ながら、人殺しはご法度なのでできません。ですが何らかの方法で村の儀式を止めればよろしいんですね」

「……。はい……」

「私はしがない探偵なので、大したことはできません。正直なところ、警察に駆け込んだ方がいいのですが」

「……」

「この文章じゃ、そうもいきませんね」

そう言って、私は手に持っていた血文字の紙を折りたたんでテーブルの上に置くと大島由々子の顔を覗きこんだ。

「持っておきますか？」

「いえ……」

「では私の方で預からせていただきますね。事が済めば処分させていただきますので」

「よろしく…… お願いします」

「はい。では大島さんの住所を教えてほしいのですが」
差し出したのは別の紙とペン。

コクリと頷くままに、大島由々子はさらさらと住所を書いて、私の下に差し出し、私はその紙の中を覗きこむ。

長野県の奥地。くわしくは知らないがその山間の地区らしかった。
知らない場所だなあ――

「お願いします…… 村の人を…… 止めてください」

「あ、はい……出来る限りは。後ソレにあたっては村の伝承等も少し教えていただけると」

「……『六の獣』……深き闇」

「え？」

「……。なんでも、ありません」

何か言いかけて途端に口を噤む大島由々子。

私は奇妙に思いつつも深く突っ込むことはせず、小さく頭を下げるままに立ちあがってコーヒーを入れることにした。

「——報酬の件はどうします？そちらさんの都合で後払いでもよろしいですが」

「……いえ。先に払わせていただきます」

——払う金はあるんだ。

多少予想が外れて私は驚きを隠しつつも、コーヒークップを二つ左右に持ちながらソファアに座った。

鞆をまさぐる彼女の様子を伺いつつ、私は紙コップを差し出すと、取り出したのは、紙きれ一枚で——

「小切手よろしいでしょうか……」

「まじ……？」

私が頷く前から、女性はさらさらと小さな紙に自分の名前と、金額をペンで明記し私に小切手を突き出した。

——二億円。

さすがに桁数には、目を剥かざるを得なかった。

「……お願いします」

「あ、ちよつと……せめて連絡先を」

引きとめる私も半ばに、大島由々子はそそくさと事務所を後にしていなくなってしまった。

私のペンを持ったまま——

私はというところばかんとして、二億の小切手を握りしめていた。これ、どうしよう。

手に入れた事もない大金に戸惑いつつ、私は残ったコーヒーを浴

びることにした。

頭が少し冷える。

私は小切手をテーブルに置き、畳んだ『脅迫文』を手に取り再度中を覗きこむことにした。

描かれた血文字が私に目入る。

微かに血の匂いを感じさせるほどに、まだ新しさを残している。

どんな人が書いたのだろうか。

丁寧な文字列から感じられるいくつかの事柄を頭の中に巡らせ何度も巡らせ――

「ていうか……これ脅迫文？」

大島という素性も知らず、なぜ彼女が殺されるのかという因果性もどうも見受けられない。

彼女の素性を調べた方がいいのだろうか。

彼女の故郷に一度乗りこんだ方が良いのだろうか。

それとも――

「……行くか」

私は彼女がくれた小切手を手に握りしめ立ち上がった。

――ジワリと熱を持つ小切手。

手の中の熱っぽい感覚に、私は眉をひそめながらも、部屋の隅のコートに手を伸ばした。

トレンチコートはお気に入りの量販店で買った茶色。

初夏の蒸し暑さに負けないように、腕をまくりかつこよく鏡の前で決めて、私は最後に帽子をかぶる。

「うんっ、格好いい」

手に持った小切手を胸ポケットにしまいながら零れる笑顔。

襟元を整えながら、私は窓の方へと振り返ろうとする――

――ビタビタビタッ……

聞こえてくる、濡れた肉の叩きつけるような音。

窓から聞こえる、ぼそぼそと、何人かが互いに囁き合うような、とても小さな声。

誰がいる――

「……」
眉をひそめ、窓のカーテンを開くと、そこには視界を覆う程、びつしりと手形の様な跡が浮かんでいた。

蛙の様な手の形は、泥をつけて窓を這いあがったのか、土気色に汚れている。

二階のビルの窓が黒い土の手形にまみれている。

（――）
事務所の入り口から聞こえてくる囁き声。

小さな、耳を澄ましてもわからないほどの細い声に、私は目を細めグッと帽子を目深にかぶってカーテンを閉めた。

そして、事務所の入り口の扉を開いた。

左右に広がる薄暗い廊下。

チカチカと切れかけた電灯が足元を照らし、窓一つない廊下に私の影が映し出される。

「……」

足元を見下ろせば、そこにはグツシヨリと雨粒に濡れて色を変えた床。

ずっと誰かが扉の前に立っていたようだった。

「……」

黒ずんだ水の軌跡は、薄暗い廊下の向こうまで伸びていき、粘りつくような暗闇の中で途切れている。

（……何かが追ってきている）

――背中を感じる、僅かな視線。

ねっとり絡みつく気配は、絶えず複数で私の身体を舐めまわす様に見ているように感じる。

これが大島由々子の感じる『恐怖』

この向こうに、怪しげな儀式がある――

「……」

私は部屋の電気を全て消すと、探偵事務所の扉から廊下へと一歩

を踏み出した。

雨の中に混じってノイズの様な囁きが聞こえる。それは耳元を掠め、私はノイズに眉をひそめながらも扉に鍵を掛けた。

私はコートの中に突っ込んでいた手帳を取り出してペンを走らせる。

『儀式について』

『彼女の故郷に関して』

二頁に分けて項目を作ると、私は手帳にペンを挟んで胸の内に手帳を挟じりこんだ。

まずは大島由々子さんの近辺を調べてみないと。

私、水樹幸一は今日、二か月ぶりの探偵稼業に胸を膨らませながら、事務所から一步を踏み出した。

外を見れば雨、しかしながら空は晴れている。

もうすぐ、雨が上がりそうだ。

二話目

驚いた事があった。

それは大島由々子は私が尋ねる数日前に、既に自宅から居なくなっていたという事だった。

夫からの搜索願が出ていたようで、彼女の近辺を調べていた私はおかげで数日程、警察に拘束された。

私は彼女から依頼を受けているだけなので、事情聴取という言う名の取り調べを経て失踪に関して疑いは晴れた。

夫からは、報奨金の一億を返してくれとしがみつかれた。

ただ小切手を受け取った以上、依頼を最後までやり遂げたいし、途中でやめる事なんて許されるわけでもなかった。

「訴えてやる、弁護士はいくらでも用意できるんだ、刑事訴訟も含めて覚悟しておけよ！」

なぜそこまで拘るのか、敢えて問う気もなかった。大凡親族遺産と言ったところなのだろう。

——出資元、か。

古今東西より伝わる言葉の中でも、因果応報、人を呪わば穴二つという言葉はとても説得力があり、また魅力的である。

何かを得た結果の相応の代価は、既に払われているという事になる。

大島由々子は何かを得た。その結果、脅迫文を送られることになったのだろうか。

それともその家系が何か関係あるのだろうか。

神への生贄。贖罪、人の罪——呪い。

「そして人の業——」

私は、一刻も大島由々子の事について調べることにした。

その為には、大島由々子の実家、或いはその近辺を調べる必要がある。

その為に、ある男を尾行しないと――

時間は午前十一時三十五分。

雨にあたりながら、我々は大島由々子失踪の件についての容疑者と思しき男を追いかけていた。

私の名前は島崎昇。部下の田島浩二を引きつれながら、雨の中ひたすらに男の背中を尾行している。

身長は田島を抜かすであろう程の比較的高身長。私も抜かれるくらいは大きいくらいだろうか。

男は今、大島一家の家屋に面した道路の隅、電柱に隠れているようだ。

おかしい。

彼は確か三日前の聴取には、彼女の家は知らないと答えていた。

―― 大方、夫の尾行でもしたのだろう。

顔は柔らかな好青年の様相を呈しているが、よくやるものと感心する。

まあ、人間は得して何を考えているのか分からない。

身なりは薄汚れたトレンチコートに身を包み、顔を帽子と襟で隠しながら、今もなおその男はじっと大島邸を見上げている。

何かを観察するように時々メモを取り、周囲を見渡す。

時々、こちらに視線を送っては、苦笑いを浮かべている――

「……気づいてやがる」

呟く小声が、嵐の様な大雨の中に消えていく。

今にも雨に押しつぶされそうな折り畳み傘を分厚い雨雲にかざしながら、私は更に電柱に身を寄せる。

それに合わせ田島も身を隠し、電柱の陰から奴を見つめる。

「あいつ……何を探ってるんでしょうね」

「ごつこだよ……」

そう呟く声すら、激しい雨脚の中に掻き消えていき、傘が重く感じるほどに雨は重たさを増していく。

と、雨の音の中、妙に響く足音と共に、コートを翻して男が大島家から離れた。

そのまま別の民家の所に足を運ぶ姿に、私たちは顔を見合わせると、急いで彼の後ろについて歩き出した。

目を覆う程の雨粒の向こう、男は一つの家の前に足を止めた。

我々も電柱の前で身を隠そうと急いで足を止める。

「……ん？」

——パシャパシャパシャッ

不意に聞こえてくる、後ろから走ってくるような足音。

どんとどんと迫ってきている。

私の耳元まで聞こえてくる——

「……？」

妙に思っ、後ろを振り返ると、そこには部下の田島が同じように電柱の裏に隠れていた。

「……遅いぞ、ちゃんと付いてこい」

おそらく遅れて着いてきたのだらうと思い、私は小さな声で部下を叱咤した。

部下は少し不思議そうな声で小さく首を振る。

「い、いえ。僕はちゃんと後ろにいましたよ」

「……」

田島の後ろには道路の視界を奪う程の雨のカーテンが広がり、その中には人影が一つも見えない。

誰もいない。

あるのは灰色の景色のみ。

聞き間違いと思い、私は「すまない」と田島に頭を下げると、再び男の方へと目を向けた。

「——ありがとうございます」

男は民家の玄関の前で頭を下げて民家の玄関前を離れていき、私は距離を置いて、同じようにその民家へと足を運んだ。

パシャパシャ

足音が激しい雨の中に響いている。

耳障りなくらいに——

「すいませんっ」

家に入ろうとする家主を引きとめようとしながら、まだ耳元で水を跳ねる足音が聞こえてくる。

今度は一つではなく、二つ、そして三つに増えていく。

足音が耳元まで近づいてくる——

「あら、あなたは？」

そう言っただけに戻ろうとしていた家主の女性が振り返ると共に、足音はピタリと止む。

耳障りがなくなり、私はホッと一息つく、警察手帳を片手にかざし、女性に尋ねる事にした。

「——二、三簡単なことをお聞きしてよろしいですか？」

「あ、はい……」

戸惑いながら、女性は私の言葉に頷く。

「先ほど、ここにコート姿の青年が来ましたね。彼は何かを尋ねて行きましたか？」

「ええ。いつ頃から大島さんの奥さんが見えなくなっただけで聞いてきましたわ」

「他には？」

「大島さんの奥さんが普段どんな方かと聞いてきたり、相談や悩みを受けたことがなかったかと聞いてきたわ。」

先ほどの人の話だと、会った時は随分と落ち込んでいたと話していましたし」

夫から大体の情報は得ている。

普段からおとなしい人柄で、あまり周りに相談を持ちかけたりはしない性格のようだった。

「そうですか。他には？」

「うーん……このあたりで何か変わった事がないかとか、何年前に大島さん一家がここに来たかって聞いていましたね」

ここら辺の治安状況？

聞いてどうする。彼が大島由々子を殺したのではないという事を我々に証明しているというのだろうか。

だがあの男がこの質問を以って自分の無罪を証明しようとしてる様子ではない。

単純に聞いている——何のために。

「……このあたりで、何かおかしいことなどはありましたか？」

私は疑問符を頭に浮かべつつも、水樹幸一がした同じ質問を尋ねてみると、女は先ほどより歯切れのいい言葉を返す。

「いいえ。ここらへんで事件なんてありませんわ。平和なものです」

「うーん……そうですか」

「——ただ、妙な事があります」

「？」

少し暗い表情になり、奥さんはややあつて躊躇いがちに告げた。

「自治会でも話している所なのですが、最近、冷蔵庫などの食べ物は齧られていると言う事が、どの家庭でもあるのです」

「……。ねずみ、ですか？」

「この街の下には、古い地下道がその裏山まで伸びていて、そこから野生の動物が出てきているのではないかと、皆は言っているんです」

ばかばかしいと思えば思う程に力が全身から抜け、聞いているのだるくなり、私は傘を持つ手が重たくなるのを感じる。

それとは反比例して雨はどんどん強くなっていき、私の身体にのしかかる。

「ただ、皆一様に言うのは、齧られた野菜やソーセージの歯型は全て人のものに酷似しているんです」

目の前の景色すら霞むほどに——分厚い水のカーテンが私の視界を遮る。

パシャパシャ

いくつもの人間の足音が聞こえる。

「中には綺麗に袋から取り出して食べきっているものもあって、それが半月に一度、どこかの家に置きかえられます」

女の姿がぼやける。

「それはそれは……とても綺麗に」

まるでマネキンのように唾つ口元に凹凸がなくなる——

「それくらいですかね。警察の方にもこの事は頼んであるのですが」

「……ご協力ありがとうございました。我々は引き続き捜査にあたりますので」

奥さんは頭を下げるのを見て、私は背を向け警察手帳を取り出した。

びつしりと十年間書きこんだページに新たな落書きが書きこまれる。

私はペンをさらさらと動かすと、顔を上げ、部下の田島を呼び寄せようとした。

「おいっ、田島」

——雨の音が途絶える。

途端に道路に静けさが広がり、どんよりとした雲の下、雨が上がる。

ピチャピチャと電線から雨が滴り広がる水たまりを叩く。

手から100円で買った傘が水たまりにすり落ちて、水しぶきが跳ねる音が閑静過ぎる住宅街に響く。

人気はなく、あるのは街の景色と電柱の立ち並ぶ道路の景色だけ。

誰もいない――

「……田島？」

ザアアア……

微かに水の流れ落ちる音が聞こえる。

ふと遠くを見れば、道路の端に開いたマンホールが見えて、雨水がどんと地下水道へと流れていた。

薄暗い闇がマンホールの奥に続く。

覗けば、吸い込まれるほどに――

「……」

おそらく帰ったのだろう。

あのバカ、水に濡れるのが嫌だからって。

異様なほどに静かになった街中で、私は悪態をつくと踵を返した。とりあえず署に帰ろう。

私は警察署への帰路へと付くままに、足元に転がるビニール傘を拾い上げ、その場を後にした。

ゴボリ……

開いたマンホールから、何かが詰まるような音が聞こえた気がした。

気がしただけだった。

三話目

大島家の裏手にある裏山に上り、雑木林を抜け、見つけたのは小さな洞穴だった。

鬱蒼とした空間の中には、ゴミや空き缶が散らかり、人が入ったような形跡がいくつも見受けられる。

濡れた落ち葉を踏む音が薄暗い林の中に響く。

私はペンライトをかざし、中を覗こむ。

洞窟の高さは、おそらく人が少し屈んで通れるような場所。

光を投げ込んでも、奥に広がる闇を払えないところを見ると、中を相当曲がりくねって深い。

まるで、蛇のような形を彷彿とさせる。

そして鼻を突く、僅かな死臭。

蠅の一匹も飛んでいないところを見ると、綺麗に食べきっているのだらうと感心するがどこもおかしい所はないように思える。

ただ、この洞窟が存外にせまい事、そして空気が淀んでいる事が重なって、中の空気はゴミ処理場よりも深い瘴気に満ちていた。

私は帽子で口を押さえながら、ペンライトで中を照らしながら、ゆっくりと奥へと進んでいく。

重たい空気が身体を包み、意識が遠のくほどの狭さに、私は目を細める。

光を目の前に照らし、闇の奥へ進む――

カラン……

程なく、微かに何かが足先にあたるような音が耳元で響き、私は視線を落とした。

暗闇に手を伸ばし、ペンライトを手元に近づけると、ソレは白い

塊だった。

中がしゃぶられ空洞になり、表面に肉片のこびりついた、骨。

「……」

ペンライトで周囲を照らすと、更に大量の骨がどつさりと目の前の行き止まりに積み上がっていた。

カラリと頭蓋骨が不意に転がり落ちる。

人の頭ほどの頭蓋の窪んだ眼が、暗闇に目を細める私の視界を覆う。

「……さて」

私はペンライトをかざしたまま、腰を落とすと、積み上がった骨塚の周囲を探す事にした。

欲しいものがいくつもあった。

そしてそれはここにあるな、という予感が私の中でぐるぐると渦巻いていた。

——暗闇の中、まさぐっていた指に何かがあたる。

それは、骨の感触とは違うもの。

おおよそ毎日触ることになるであろう、プラスチックの感触。

私は唇を軽く噛むと、ペンライトを握る手に汗を滲ませつつ、恐る恐る手に取ったソレを光にかざした。

それは三日前、彼女が持っていたままの、私のペンだった。

「……すいません。遅れてしまって」

私は、ペンをポケットの中にねじりこむと、寂しさと悲しさを胸に抑え込みながら更に暗闇をまさぐった。

——彼女はここにいる。

手を泥に浸しながら、私はペンライトを口にくわえ、骨の中に手を突っ込む。

（……あ）

ガサリと手に這う、濡れた紙の感触。

私は手を伸ばし、こびりついた骨片を払うと、ペンライトで自分が手に取ったものを照らした。

暗闇に浮かぶ濡れた紅。

私の手には、小さな手帳がそつと置かれていた。表紙を開き中を覗きこめば、びっしりと白いページを黒く埋めんほどに書かれた文字の山。

その筆跡は大島由々子のもの。

「……行きましょう、一緒に」

私はそつとメモ帳を胸に強く抱きしめると、腰を上げるままに恐る恐る踵を返し、暗闇を光で照らした。

うつすらと零れる入り口の光。

外が晴れた事を示し、私はホツとした面持ちでペンライトで周囲の壁を照らしつつ洞窟を抜けだした。

「ふう……」

ポタポタと雨の残り露が私の首を掠め、鬱蒼とした雑木林にぼんやりと霧がかかり始める。

空を見上げれば、日は傾いていて、夜が降りてくるのを感じる。暗闇は足元から這いあがってきて、私はペンライトをポケットに収めながら、僅かに感じる夜の匂いを鼻に吸いこんだ。

（……大島由々子さんは、死んだ……）

洞窟の傍に立てていた傘を取り、近くの木の根元に腰を落とすと、私は胸に隠していたメモ帳を開いた。

暗闇が広がる中、視界も悪くなり、私はペンライトで中を照らす。……読めない」

それでも血と雨にぬれて、ページはどこもかしこもひつつき、文字は殆ど滲んで見えなくなっていた。

無理に剥がそうとすれば、読めなくなりそうで、私は読めるページだけに目を通す。

——五月、三十日。

書かれた最後のページの数行だけがかろうじて読める。

（ついにこの日が来た。まだ日が明るいですが私の最後の一日をここに書きしるそうと思います。）

今日は娘の誕生日です。娘の為に夫と娘の三人で買い物に行きました。大好きなケーキを買い、色々なお店を回りました。買った物は食品に、プレゼントのおもちゃと大きなケーキです。

娘は笑っていました。それだけでよかったです。娘の笑顔を私の最後の贈り物とさせていただきます。

さよなら……)

その後にも、びっしりと文字が書かれているが、残りあまりに滲んでいて更に夜も降りてきてとあつては、読むのも辛い。

ただその分だけでも読み取れることはいくつかあった。

(……彼女は、自分の死を予期していた。受け入れているという事は、結構前から彼女は今年の、その日に死ぬことを宣告されていた) 癌や、不治の病の類ではない。外的要因によって殺されることが分かっていた。

(……あの文章は、彼女が言うには神が呟いた言葉らしい。それには儀式の一節だつて言っていた。

それに則つて殺された——彼女は巫女さんか何かだろうか)

私は村の外にまで影響を与える程の強い力に、僅かに身震いを覚えながら、メモ帳を閉じようとした。

(……ん)

——視界の端に映るページの黒い染み。

空白だったページにうつすらと文字が浮かび上がり、私は驚いて慌ててペンライトで照らした。

そこにははつきりと日本語の文字が映し出されていた。

——生きて、ください。

滲みだした文字は強く書かれていて、私の胸の内に強く刻まれた。「仕事は、きっちりこなしますよ、由々子さん……」

私はそつとメモ帳を閉じると、胸ポケットに収めるままにペンライトの明りを切り立ち上がった。

そして傘を片手にすっかり薄暗くなつた雑木林に向き合う。

(とりあえず、今からお師匠の所に行つて話を聞こう。それからで

も遅くはない)

——ぎあああああああああああああああ！

薄暗い雑木林の向こう、遠くから聞こえてくる男の悲鳴。

誰かが襲われているのだろうと思いつつ、師匠のところに向かう事に私は胸を高鳴らせながら、暗闇を踏みしめた。

ズリズリと肉を引きずる音が雑木林の中に響き、何人かの人影が私の横をよぎる。

私を見ている。

事務所のある貸しビルのすぐ傍の路地。

誰も入らないくらいに薄暗くてどこに続いているのかすらわからない道がそこにはあった。

野良猫一匹すら通らず、あるのは積み上げられた生ごみの異臭と、地面に散らばる肉片のようなもの。

いずれも不快なものばかりで、近づく者は誰もいない。

そんな薄暗く、汚く、そして文字どおり臭い路地裏に、一軒の小さな家があった。

ビルとビルの間に挟まったその家は木造建て、人の出入りを遮る門扉は、人の丈を軽く超える頑丈な木の扉。

鬱蒼とした竹林と小さな砂利を敷き詰めた庭に囲われた木造の家は、一階建の小さなお店。

看板もないけど、人もいないそんな秘境が、私の師匠とその師匠である大婆様の住む家だった。

すごく近い場所にあるけど、大凡二年ぶりの帰郷。

私は巨大な門扉の前に軽く二度門を叩いて、声を潜ませる。

「失礼します」

地鳴りのような音を立てて開く門の向こうには、竹林に囲まれた小さな庭が広がり、私は石畳の通路を通り玄関の扉を叩く。

「大婆様、お師匠。いらっしやられますか？」

程なくして聞こえてくるのは、明るい老婆の声。

「おや。家出坊主が帰ってきたかい」

私が手を触れる前に玄関の扉は横に開き、土間が目の前に広がる。奥には今に繋がる廊下、そしてひょこりと黒い犬が廊下の奥から私を出迎えてくれた。

犬は嬉しそうにヒクリと耳を尖らせると、カツカツと木の床を鳴らして私の下へと駆け寄ってくる。

私は土間に片膝をつき、飛び込んでくる大きな犬を強く抱きしめた。

「幸一！ 久しいではないか！」

イケメンボイスなんて世間でもてはやされるであろう低い声を発する黒い犬に、私は思わず苦笑いを浮かべる。

「お久しぶりですお師匠……」

「ははっ、本当にな。二年も外にでて何をしていたのだっ」

「あはは……近くで探偵事務所を開いていました。多分御師匠もごらんになっているはずですよ」

「ああ、水樹探偵事務所だろ！ いかにも流行らなさそうな名前して、客なんて来なかったらうにっ」

「ご明察です……」

「全く危うい仕事を受けていると言った顔だなあ、このバカ弟子がっ」

「お、大婆様に会う前にベトベトになりますっ」

女の子が聞けば鼻血が出るくらいの良い声に肩をすくめながら、私は頬を舐める師匠を引き剥がした。

師匠は寂しそうに耳を垂らしつつ、振り返って私に肛門を見せる。

「むう……まあいい。婆様が呼んでいるぞつ、早う来いっ」

「師匠。いつもその姿なんですな」

「スカートの中身が良く見えるからなつ」

自慢げに告げる犬の師匠は、ここを出て行つた二年前と変わらず、私は懐かしい思いで靴を脱いだ。

そして師匠に連れられ、私は奥の茶室へと足を運ぶ。

襖の向こうには人影が、じっと正座しているのが見え、師匠は襖の前で声を張り上げた。

「婆様、幸一が見えたぞつ」

「……入りなさい、坊主」

懐かしい呼び名だった。

言われるままに私は床に正座をすると、ソツと襖を開き床に額が擦れるくらいに頭を下げた。

「……夜分遅くに失礼します、大婆様」

「——懐かしいの、幸一」

皺を頬に浮かべニツコリと笑う柔和な表情。

簡素な髪飾りで髪を結び、藍の和服姿のよく似合う細身の体を囲炉裏の前に佇ませ、そこには銀髪の老婆が私を見下ろしていた。

「婆様。懐かしいだろうつ。二年ぶりだぞつ」

嬉しそうにそう言い、犬の姿をした師匠は老婆の前に座る。

私は顔を上げると、床に座ったまま滑るように茶室に入り、襖を閉め、優しい笑みを浮かべる老婆に向き合った。

注視する紅い瞳は変わらず、私を見透かしているようだった。

「えと……そのお久しぶりです。大婆様」

「——ふふつ、積もる話をしに来たのではないのだろう」

「また、いずれさせてください」

「良い。顔を見られただけでも、私は満足している」

嬉しそうに顔を綻ばせ、老婆は膝に置いていた手をそつと上げ私の方へと差し出す。

私はコートの中から大島由々子の日記帳を取り出した。

そして老婆は渡されるままに、張り付いたページの一部を覗きこむ。

「……」

「なんじゃそれ？」

少し表情を強張らせる老婆の横から、お師匠は彼女の傍に寝転がり、前足の上に顔を乗せて欠伸を漏らす。

——老婆の目は少しだけ険しくなった。

「幸」。少し難しいものを貰ったようじゃの。……いやな手相を見ているようじゃよ」

大婆様は種種の占いを扱う占い師や霊媒師だった。ネットでもそう言った物を立ち上げているようで、収入も上々だった。

あくまで、表向きではあるけども——

「……少し見てみようかの」

そう言つて、大婆様はページの切れはしの白紙をちぎると、囲炉裏の燐りの中へと投げ込んだ。

——立ち上る炎。

舞い散る黒い吹雪。

まるで龍の如く瞬時に囲炉裏の中から這い出し、首をもたげてどす黒く燃え上がった。

炎の龍は恨めしげに老婆と、そして私を見下ろしている——

「でかい呪いじゃ……」

しぼんでいく黒い炎。

フツと息を吹きかけるだけ、老婆の前に龍は形を失い、囲炉裏の中へとシュルリと消えていく。

黒い煙だけが微かに立ち上る——

「深くは言えんが……暗き者達の末裔じゃの」

「……」。大島由々子さんは『神』であり、儀式の言葉の通りに殺されると言いました」

「然り。神を名乗る者たちじゃろ。しかし人から拒絶された神は、本来存在を許されんはずじゃ。」

暗き者は神の中におるか」

「？」

私が首を傾げていると、御師匠は目を閉じたままこう言った。

「婆様は大したこと言つとらん。まだその『神』を崇めている連中がいると言つ事じゃ」

「……」

「だが、婆様の見立てでは、既に『神』は別の何かに乗っ取られているだかの」

「暗き者……」

「うすら寒い連中だ。こっちを見てニヤニヤ笑つておる……」

少しお師匠はいらいらしているようで、ムスツと顔をしかめたまま惚ける私から顔を背けた。

大婆様はそんな師匠を見て、困ったような笑みを浮かべ、そつと頭を撫でて、尖った耳の根元を爪で搔いてあげている。

そして、澄んだ蒼い瞳で私を見つめる――

「……神は、自然の体現者じゃ。その神を乗っ取ったという事は、その土地は既に奴らのテリトリ―。行けば、必ず呪いの形そのものに、お前を殺すだろう」

「……」

「――他にもあるじゃろ。見せてみなさい」

ほっそりとした指を差しだされるままに、私は胸ポケットに収めていた、大島由々子の『脅迫文』を取り出した。

差し出すままに、私は四つ折りにした紙を開く大婆様を見つめる。

――ほんのりと綻ぶ頬。

ソツと紅い血文字の紙を畳に置くと、私に返すままに大婆様は少し希望に満ちた目で私を見つめた。

「良い知らせじゃ……」

「はい？」

「暗き者達は全てを取ろうと考えておらんかったようじゃ。その土地と信仰と人魂、それらを手に入れば、残りは要らんかったとい

うわけじゃ」

「……？」

「見てみなさい。人を殺すという文がいくつも並んでおろう。じゃが、人を生む、生かすと言った文章はないんじゃないよ」

「だけど私には良く分からず、紙を手に取りながら、私は血文字に首をかしげていた。」

と、眠たそうに欠伸をしながら、犬のお師匠は私を見上げ、疑問符を浮かべる私に助け船を出してくれた。

「『神』は自然の体現者だ。命を生み、生かし、そして安らかな死へと導く。命が紡ぐ長い螺旋をずっと見守っている存在だ。」

「だが奴らが奪ってお前に付きつけた『神』の存在は、死を司る半身しかない」

「あ……」

「奴らはおそらく『神』を生ける『神』と死せる『神』とに引き裂き、半身たる死せる『神』を喰らおうとしているのだろっ。」

「六月以前の文章がないのが良い証拠じゃて」

大婆様から聞いたことがある。神は生と死の二つの面を司る尊き存在である、命を停滞させないように循環させ、世界を生かす様に命の川の流れを作っていると。

「坊主。お前には既に呪いが掛けられている。おそらくこの呪いは暗き者達が喰らった『神』の魂じゃろ。」

「その力を『神』の元に返さねばならない」

「はいっ……」

「坊主。引き裂かれた半身を探し出さない。そして『神』を蘇らせ奴らを山の向こうへと追い払うのじゃ。」

「おそらく、お前の依頼が達成できる道はこれしかないだろう」

「はいっ……」

私に新しい目標ができた。私自身に掛けられた呪いを剥がし、大島由々子との契約を履行するために、『神』を探し出すと言う目標が。

「……のう、婆様」

と、犬の師匠は口をすばめ、首をもたげては大婆様の方へと鼻をヒクつかせた。

「ワシらで幸一の呪いを解いても良いんじゃないぞ？ そっちの方が何かと捗るじゃろうて」

「お前……坊主がなぜここを尋ねたか、知つての物言いか？」

呆れ切った表情で肩を落とす大婆様に、犬の師匠はペタリと尖った耳を垂らし、ウツと苦い表情を浮かべる。

「坊主は、呪いのあるなしに関係なく、この問題を解くと決めとるのじゃ。大島由々子というクライアントの要望に応えようとな。」

お主がそれでは、坊主が自立した意味がなかるうて」

「ぐ、ぐぬぬ……」

「何がぐぬぬじゃ。ちつとは坊主の立場というものを理解してから口を開かんかバカ弟子が」

「……弟子に甘くて何が悪いんじゃない……ふんだ……」

しよぼんとした感じで師匠は尻尾を丸めて拗ねたように体も丸めて蹲る。

大婆様は呆れたようにため息を漏らすと、火かき棒を囲炉裏の端に置き、徐に胸元に指を差し込んだ。

そして取り出したるは、ほっそりとした白い和紙を指で丸めて糸の様な感じにしたもの。

「手を出しなさい」

私は言われるままに、そっと手を差し出すと、大婆様は細く丸めた和紙を指輪のように私の中指に結って嵌めた。

ジンワリと感じる熱。

嵌めた途端、指先からの暖かさが腕を伝って全身を流れていくような感覚に、私は目を見開いた。

「単なるお呪いじゃよ。……お前が笑顔で帰ってこられるようにの」

「……大婆様」

「死ぬなよ、幸一……」

「……ありがとうございます。僕は必ず帰ってきます」

「崩天の呪術の後継ぎが偏屈な老犬一匹だけでは困る。お前には、わしらを継ぐ立派な呪術師になつてもらわねば……」

その言葉に、ギクリとしたのか御師匠のまるめた背中がビクンと痙攣して、更に体を丸めてしまう。

私は手を下ろすと、お師匠の頭に手を伸ばして、あやす様に何度も撫でる事にした。

撫でるたびに耳が動いて、お師匠はやっぱりお師匠だなと感じた。

「……幸一い。ワシ甘いかのぉ」

「それがお師匠の魅力ですよ……僕は何を持っていいいのですかね」

「ワシもついていきたいのぉ……むう、油を持って行け。ペットボトル三本分がちょうどええじゃろ……」

パタパタとふわふわの尻尾で床を掃除しながら、お師匠はまだ少し拗ねた感じで私にアドバイスをくれる。

「獣は概して火を恐れる。何より火はお前に力を与える。

油を火を喚ぶ為の呼び水だ。種火とセットで持っていきなさい。

炎は呪術の基本だ」

「マツチとライターと油三本ですね。わかりました」

「いざとなれば、口に灯油含んで、種火とセットで炎を吐いてしまえッ。」

して、婆様は何を持っていいいと思う？」

大婆様はニツコリと微笑んだまま、囲炉裏の火を軽く火かき棒でなぞりながら、目を閉じて囁く。

「獣は血の跡をたどって獲物を追いかける。深く、どこまでも追いかけて獲物を捕まえようとする」

パチリと囲炉裏にくべた木炭が爆ぜて、火の粉が舞い上がる。

「だが、それは時に仇になる。人を辞めた者達は自らを超越者だと信奉するが、実際は夜に身を捧げた従者に過ぎない。

血を拭うものを持ちなさい。それは必ずお前を助ける。彼らを惑

わせるものを持ちなさい。音と光は彼らの五感を鈍らせる」

「……はいっ。わかりました」

「今日はもう遅い。夜が降りてきては外を出歩くのも怖かるう、坊や」

と、お師匠は跳ねあがるように起き上がると、私の背中に飛びかかるようにのしかかってきた。

結構バカにできない重さなわけで、頭の上に顎を置かれながら、お師匠の荒い鼻息に私は顔をしかめた。

「お、お師匠。重いつす……」

「よしっ、婆様っ、今日は幸一をここに泊らせるぞ、異論はないなっ」

「うへえ、酒盛りですか……」

「おうよ、今日は呑もうではないか。お前が二年間どんな仕事をしていたのか聞きたくて仕様がないうぞっ」

そう言いながらじゃれつくお師匠。

ゴンゴンと顎で頭を叩かれ、私は立たされると、お師匠に袖を引っ張られて茶室を後にした。

「お師匠……酒癖悪いんですからあんまり無茶しないでくださいね」

「何を言っつ、お前こそ先に酔いつぶれるなんて真似はするなよ！」

「うっつ……努力します」

明日は、おそらく村の方へと足を運ぶだろう。

そんな私をお師匠は気前良く見送ってくれているようで、私は飲みたくないような、嬉しいような複雑な気持ちで庭の隅の酒蔵まで歩いていた。

ささめく竹林の向こうで、半分の月が私を見下ろしている。

今日だけは、お師匠と大婆様と一緒にこの静けさに身を浸りたいなと、私はしみじみと思いつつ、お師匠のわがままに付き合っただった。

四話目

結果として、彼女の故郷の居場所を細かい所んで調べるのに二日もかかってしまった。

といつても、大婆様の御言葉を借りて、場所をようやく知ることができたのだが。

——まったく……それで二年もよう探偵なんぞ名乗れたもんじゃ。

——すいません……。

——まあ、そこがお前の可愛い所じゃがな

——はい？

——忘れい。ババアの戯言じゃよ……。

そして三日後、私はお師匠と大婆様に見送られて、事務所を出て長野県行きのローカル電車へと飛び乗った。

都市部を走る列車はさすがに最初は一杯だったが、都市近郊から田舎へと近づくにつれて人気もなくなってきた、私はリュックを両手に抱えながら、前後に向かい合わせになったシートに座った。

周りには既に人は少なく、私は嬉しくなつてリュックを脇に置いて二人掛けのシートを一人で占拠する。

ほんの少しのぜいたくに、私は頬を綻ばせつつ、ポケットに手を伸ばした。

取り出すのは、大島由々子さんから貰った紙。

——いいか、幸一。お前が抑えておくべき事柄は二つある。

「よつと」

電車の窓を開けながら、ムシツとした初夏の風が吹き込んでくるのがわかる。

手に持った紙が夏の風に揺れる。

仄かに稲穂と青草、そして山のの匂いが鼻をつき、徐々にトンネルが迫ってくるのを見つめながら、私は生温かい風に目を細めた。

そして紙の内容を見つめ、お師匠の言葉を思い出す――

――神の半身は既に奴らに喰われている。もう半身は、隠れているか殺されているだろう。

刹那、日の光が遮られ、風の足音がけたたましく耳元を掠める。トンネル内の特有の薄暗さが車内に広がり、私は目を細めそれでも生温かい風に揺れる紙を見つめる。

一枚目の、大島由々子から貰った紙は暗く、それでも滲んだ言葉ははっきりと見えた。

文字が闇に紅く浮き上がり、風に揺れる草穂のように靡いて見える。

まるで生き物のようだ――

――しかし言葉は生きている、古く捨てられ、言霊は失われてしまったが、それでも言葉は必ずかの地にて生きているはずだ。

暗闇が晴れ、トンネルの向こうから零れる光に、私は顔を上げると、眩さに目を細めつつ零れる風に頬を当てた。

そしてトンネルを抜け、強くなる日の光。

私は眩さに思わず目をつむる――

――言葉は肉であり、神の肉とは即ち自然そのもの。自然現象となっているものもあれば、普通に言葉になっているものもある。

――人もまた自然……ですね。

――共生、共存。……久しく人の世界では忘れられてしまったがな。

――はい。

――12の『言葉』を探せ、かの地にて改めて言霊を吹きこみ、呪い、かの地に眠る神を降ろすのだ。

――後六つでは？

――それは偽言だ。本当の『言葉』はかの地にて、今も眠っている。

るはずだ、その言葉を見つけ次第、聖地を探せ。

——言霊を吹きこむ場所、ですね。

——いい子だ……神が眠る地を目指し、聖地にて神の『言葉』を並べよ。神は祈りに応える。

——わかりました。

——本来ならその地を知る人物も、言葉に魂を吹き込む役も神事の巫女であるのだろうが、おそらく生きてはいまい。

——もしかしたら……。

——お前の依頼者がそれなのかしんな。

——由々子さん……。

——呪術の一族として、託された呪い、かの地にて見事果たしてみせよ、幸一。

——はいっ、お師匠。

——ワシも行きたいのおおおおお！

——お師匠……。

——行きたいおおおお、婆様ああああ！
光に目が慣れていく。

ゴンツと最後に拳骨を喰らって気絶をするお師匠の事を思い返し、不意に笑い声が零れて、私は顔を伏せた。

そして紙の中に書かれた文章を目に焼き付けていながら、またトンネルの暗闇が電車を飲み込んでいく。

暗がりの中に紅く映し出された血文字、そして黒く塗られた紙に、私は眉をひそめ顎に手を当て考える。

——偽言、お師匠はそう言った。

おそらく、この六つの言葉に祈りを込めても、おそらく引き裂かれた神はその姿を現さない。

なら、この文章は何か。

（祭事で使うと大島さんは言っていた。時の流れの中で言葉は変わっていったのだろう。）

普通に聞いても真言は見つからない。

或いは、言葉としての形は失われているのだろうか――)

言葉は、おそらく村の人達が儀式の中で使われている言葉で、それらはかつて神の言葉とされ、儀式の中で忠実に行われてきた。

そしておそらく、それは向こうの村でも行われるのだろうか。

それが、私に科された呪い――

(文章に書かれたのは、五人。そして新しい一人――いや、最初に配置されているのは六人か)

『最初の一人』は目を覚ましている。

おそらくこの人がこの紙に載っていない、六月以前に眠っているか、死んでいるかの一人であっているのだろう。

なら最初の五人が死に、新たな一人が死んだ時点で『最初の一人』が蘇る。

そして、『神』が蘇る――

――蘇る？誰？

暗闇はどこまでも広がり、電車を飲み込んでいき、私は薄闇の中、ひたすら頭の中で思索を巡らせていた。

(……人が蘇るってどういう事だろうか。本当に蘇るのだろうか) ガタンガタンと列車が線路を走る音が窓の向こうから、トンネルに反響してやけにけたたましく聞こえてくるのがわかる。

(……人が死ぬのは自然の摂理、蘇るのは人の摂理。……『人』がいる。誰かが人を蘇らせようとしている。誰？

最初の人？生き返る方法は？それとも……死ねない)

――サラリと背中を撫でる悪寒がした。

(……暗き者)

ゴオオオオオオッ

トンネルを抜けて騒音が窓の向こうへと飛び出していく。

日の光が三度窓から零れ、私は眩さに顔を上げ周りを見渡した。

流れていく田園風景。

山に囲まれた田舎の景色は徐々に深まっていき、鬱蒼とした緑はまるで未開の地のような様相を呈していた。

そおつと表面を撫でるように、田んぼの上を風が波紋を広げ走り抜けていく。

窓から零れる風に手に持った紙がハタハタと揺れ、私は戸惑いを覚えながらも帽子を押さえまた紙に目を配った。

（眩しさが柔らかい……）

——光に気配が薄れていく。

私はホツとため息をつきながらも、紅い紙に浮かんだ七人の物語の一節について視線を走らせた。

（こっちは七人。だけど死んだのは六人で……違う物語の一節？）
こっちの黒い紙には、見てとれるほど、力が込められているのがわかった。呪術師のはしくれの私ですら、この紙には『怨念』がこもっている。

これはおそらく神事の勅——儀式で使う言葉の一節だろう。

（多分同じ物語——生き残っているのが『新しい一人』だろうか……新しい、外から入ってきた人間が、生贄になると言う事）

人を喰らおうとする、強い呪い。

七人もの人間をこの物語に引き込み、言葉通りに殺すであろう呪いの力。

神の力——

（……引き裂かれた、半身……）

この手紙は、おそらく大婆様のいう暗き者達の書いたものだろう。神様を喰ってしまっただけという。

（神様を食べる、死ねない——人魚伝説を思い出すなあ……）

——神は自然の体現者。

お師匠がいった言葉を僅かに頭の中でリフレインさせた。おそらく神が死ねば自然の流れが滞るのだろう。

死ねない、死んでも生き返る——

神の死した地は、おそらく私の目的地は、さながら不死の村にでもなっているのだろうか。

（天の理が消える……『人』が目覚めます）

私は紙を畳みポケットに挟じりこむと、小さなため息と共にまた周囲を見渡した。

——じつと見つめる熱っぽい視線。

「……え？」

誰かが私を見ている。

だけどそれは嫌な気配ではなく——私は眩さに滲む視界を擦り、周囲を見渡した。

そして、向かいの席に目を向けると、女の子が座っていた。

真っ白な長い髪。

透き通るほどの綺麗な肌。

日の光を火照った頬に当て、小さな手にススキを握りしめ、なんだか眠たそうにジトリとした目つきで女の子は私を見つめている。

その目は黒く、吸い込まれそうだった。

日はまだ傾いておらず、長い時間眠っていたわけでもなく、いつこの子が入ってきたのか、私はまるで気付かなかった。

さすがに戸惑いが隠せず、私はぎこちない表情を浮かべ、そろそろリュックを脇に置き、白髪の少女から視線を外す。

それでも、女の子は視線を外さず、私を見つめている——

「……えと……なんででしょうか？」

さすがに気まずさが隠せず、私が顔を上げ首を傾げると、女の子は無表情のまま俯いて無言で首を振った。

用はないらしい。

ぼんやりしている間に、乗客が別の車両からやってきたのだろう。さすがに椅子を占拠しすぎたのかなと思い、私は周りを見渡せば、やはり他の席には人の気配はなかった。

「あ……」

——その代わり、『影』があった。

日の光に霞みながら、つり革につかまる人の形をした黒い影がいくつもずらりと横一列に並んでいるのが見える。

椅子には綺麗に老婆の輪郭を模した影が、ペラペラのまま俯き加

減で肩を寄せ合い座っていて、先頭車両の先には、影人が帽子と制服を被って、窓の向こうに指差しながら列車を運行しているのが見えた。

トトトツ

甲高い子どもの笑い声。

軋む木の床を踏みながら、影の群れの間を縫うように、姿なく黒い足跡がいくつも浮かんだでは車両の奥へと消えていく。

流れていく景色、吹きこむ夏の風。

列車は揺れながら田んぼを縫うように線路を走っていき、線路は山間の向こうへと吸い込まれる。

まるで時を遡るように、田舎の景色へと――

「……」

ひたりと手の平に這う冷たい濡れた感触

周囲の変化に驚きに目を丸くする私に、白髪少女が近づいてきて、私に手を重ねて何かを握らせてきた。

手の平を開けば、そこには竹の箸。

更に驚いてにじり寄る少女の顔を覗きこめば、口元には小さなご飯粒が一つ。

「……ご飯でも食べたの？」

ジトリと私を見つめる白い瞳。

少女は無言のまま首を振ると、やがて踵を返してトトツとペラペラな人の影を縫うように通路へと飛び出した

日に透き通るような白い肌は、そのまま次の車両へと消えていき、私は首を傾げながらも、渡された竹の箸を握りしめる。

周囲を見渡せば、人の輪郭を帯びた影はどこをみるわけでもなく、窓に向き合い電車で揺られるままに立ち尽くしている。

（……天の理が千切れる、か）

――始まったのだろっ。

私はぼんやりと、まるで早送りされるビデオのように高速で日が落ちていく空を見上げていた。

何度目かのトンネルを過ぎて、日が夕焼け色に滲んでくる中、山と山の峡谷を過ぎては、まるで大地が抉れたかのような深い谷の間を見下ろし、レンガの橋を横目にトンネルの暗闇に目を細める。

（……次、か）

トンネルを抜けたら、日が落ちるだろう。

おそらくその先に、大島由々子の故郷が待っているのだろう。

そして――

――クシャリ……

拳を固めていて、竹の箸を持っていた手の中に紙の感触があった。手の平の中に感じる違和感に、首を傾げ、私は胸元に握りしめた手の平を開いた。

覗きこめば、小さく丸められた紙屑。

いつから握られていたのだろうか、私は怪訝に思いながらも丸められた紙を広げ、リュックからペンライトを取り出し光をかざす。

薄闇の中、光が確かに車内に零れ、周囲の影の人達を透過していく。

又チャリ……

水音を響かせ、光に引き寄せられ、歩み寄ってくる無数の人の影を横目に私は紙を覗き込む。

「あ……」

――『言葉』が描かれていた。

人の言葉ではない、文字すら描かれていない小さな白紙の紙切れ。だけどそこには熱を感じる――

「……」

グチャリ……

私の身体の周りに、滑った手形がいくつも浮かび、無数の人の影が手をかざす私の光を奪おうと覆いかぶさってくる。

小さなペンライトの明りを切り、リュックにしまうと、私は握りしめていた紙きれをギュツと両手に抱え込む。

息を吐きだし、目を閉じる。

覚えた『言葉』を頭に繰り返す――

「……木漏れ日を受け、夜を明ける、露よ眼の穂より落ちて土を濡らす、光ありて命ありて魂ありて……栄えよ」

――手の中から零れる光。

身体を押し潰すような粘っこい暗闇を照らす仄かな輝きが瞼を貫き、私は眩さに目を開け恐る恐る両手を開いて中を覗きこんだ。

そこには、小さな光がまるで蛍のようにふわふわと手の中に浮かんでいた。

漂う光は、滴のように辺りに光の粉を撒きながら暗闇を照らす。

光の粉は暗闇に無数の輝きを作り、私の周囲を覆っていた人の影は、光を透過することができず、光の奔流の中に溶けていく。

バシャリ……

光の中に輪郭が解けていき、水の跳ねるような音が床に響く――

「……三月……命の芽吹き之光……『12の言葉』の一つ」

ガタンガタン

トンネルが過ぎ、夕焼けが床に私の影を作る中、私はソツと両手に掲げていた光の滴を手の中に包んだ。

光が私の中へと吸い込まれ、身体が中心が熱を持つのを感じる。

誰かに抱きしめられるように暖かい――

「……神よ」

手の平を開けば、そこには焦げたような跡。

私は顔を上げると、神の言葉をくれた白髪の少女を思い出し、感謝に胸を膨らませた。

「ありがとう……」

私はグツと手を握りしめ、窓の向こうを覗きこむ。

列車は山を抜け、平地へと辿り、夕焼けに染まった田園風景を左右に覗かせながら線路走っていく。

どこまでも広がる田園風景の向こうには、夕焼けに照らされながら、いくつも連なる大山を背にして灯る人の明りが見えた。

おそらく集落だろう。

だけど不思議な事に、その周り、いや線路の左右に広がる田んぼ
までも、人の気配が異様なほどに垂れ流れていた。

集落の中で、火の明りが空を覆い始める黄昏時の薄闇を僅かに払
い、細々とした煙が夜空へと伸びているのが見える。

それは確かに人がいる証。

見つめる限り、そこまでは不自然だとは思わない。

だけど田んぼもあぜ道も、周囲の山も木々も、まるで散髪したて
のような仕上がりがだった。

山の木々は切り揃えられ、田は穂先の一つ一つまで丁寧に気を配
っているかのようで、あぜ道は舗装したかのように整えられている。
どこまでも、人の手が加わっていた。

自然が、覆い隠されている。

気持ち悪いくらいに――

「……」

――あそこが、おそらく私の目的地だろう。

私はリュックを手にとると、貰った竹の箸を適当なティッシュに
包んでリュックのポケットに突っ込んだ。

多分、この先も何かを口にする機会が多いだろう。

列車の速度が遅くなってきたており、降りる準備をしながらふと窓
から顔を覗かせれば、緋色と藍色の景色の狭間にぽつんと駅があっ
た。

改札と街灯とベンチと雨よけの屋根があるだけの無人駅。

人の気配なんて全くなくて、カチカチと切れかけの街灯が三つ、
寂しげに点滅しているだけ。

「……」

シューウウウウ……

どこからか蒸気の音が聞こえてきて、身体が前に引っ張られ、列
車が止まるのがわかる。

窓の向こうから立ち上る、夜の街灯に照らされた蒸気。

程なくして扉がひとりでに開き、私は誰もいない車内を見渡しな

がら、一人列車から足を下ろした。

そして後ろを振り返れば、私は立ち上る煙突の煙に目を丸くする。

「……電車……乗ったよね」

——古臭いまでの黒いフォーム。

そそり立つ煙突。そして窓ガラスのない扉。

見上げながら、思わず冷や汗が垂れた。

ガタンガタン……

立ち上る蒸気、すぐ後ろには大量の石炭を積み、ゆっくりと黒い
汽車が古臭い車両を引っ張って線路を走り始める。

緋色の藍色の空の狭間をかくぐり、長い線路の上を走っていく。
線路は田園風景の中へと潜っていく。

汽車も同じく田園風景へと潜り、黄昏の闇へと溶けていく。
ガタンガタン……

けたたましい走行音だけが、誰もいない駅に残響し、遠のいてい
く。

胸をよぎるのは、微かな孤独。

足が軽くすくみそうになりながらも、私は少し自分の胸に手をあ
て、夜の空気を少し吸い込み、目を閉じた。

カサリと指を撫でる紙の感触。

大婆様が結ってくれた呪いの紙輪から、仄かな暖かさが身体全体
に広がってきて、心の動揺が少し晴れていく。

——必ず帰ります、お師匠、大婆様。

目を開き、コートを翻して踵を返すと、私は広がる夜の闇に眼を
細めながら、点滅する街灯の下へと足を運んだ。

そこには、駅名を示しているはずの看板。

経年劣化により看板にこびりついた錆は、しかし駅の名前も前後
の駅の名前すらも飲み込み暗く隠していた。

まるで、ここがどこなのか知られたくないのかと——

「……」

「——おい、あんた」

野太い声が私の背中を呼ぶ。

コートを翻しながら帽子を脱ぐと、怪訝に眉をひそめながら私は後ろを振り返った。

点滅する街灯の向こう、暗闇から顔を出したのは、二つの影。

どちらも『人』だった――

「あなたは……」

「島崎昇だ。……水樹幸一だな」

ほっとした表情と私を疑う険しい表情が入り混じった複雑な顔を見せる島崎さんに、私は苦笑いを浮かべた。

そしてその隣で、同じく険しい顔の中にほっとした表情を滲ませる瘦躯の男に、私は首を傾げた。

前の人と違う――

「荒木で俺の部下だ。……それよりここはどこだ？」

――大島由々子さんの故郷だとは思う。

「うーん……さあ……」

ただ位置関係という意味ではどこのか分からず、私は踵を返し険しい表情の島崎さんを背に街灯から足を引いた。

暗闇がすぐに私の周りに広がっていき、目が闇に慣れ、私は夜の空気を吸い込み空を見上げる。

星が瞬いている。

北を向けば北極星が見えて、大きな星がいくつも点々と夜天を彩っていて、とても綺麗で、私はハッと目を丸くした。

指差して、大きな一等星を中心に大体の星の数と位置を数える。

そして――少しゾツとした。

（……さそり座だ。あれはペルセウス座）

――八月の星空だった。

大婆様からよく占星術のいろはについて語られた事もあるので、基本的な月ごとの星空は良く見せてもらっていた。

だからこそ、この星空は、明らかにおかしい。

（……旧暦はおおよそ七月……時間が、進んでいる。異様なくらい

に)

——天の理が千切れようとしている。

(時の流れが速い……この世界は別の時間が流れていて、空間は閉じられていて、作られているようにみえる。

それにこの加速具合……多分……。

ひどいな……これが彼女の故郷か)

——そして、これを作ったやつらがいる。

(……行こう。何が起きているのか調べないと)

私は夜空を見上げる視線を落とし、僅かに首をもたげる焦りに身を任せ駅を後にしようとした。

「おいっ、水樹幸一！」

「失礼、僕は用事がありますので。他の皆さんが来たら、僕の所に来るように言っておいてください！」

「な、何の話だ？……おいっ」

「僕は、この村を救わないといけませんっ」

「はあ!？」

「田島さんに伝えてください、人を襲う事のないようにと！」

「え……?」

戸惑う島崎さんを背に、私は暗闇広がるあぜ道へと一步を踏み出す。

夜の風はとても気持ち良く、田の穂を撫でれば寄せるさざ波のように穂が一斉に頭を垂れて私の背中を押す。

たなびくコートを押さえ帽子をきつく抑え、私は夜の空気を吐き出し口をきつく引き締め、遠く、暗い山に囲われた小さな村落を指す。

大島由々子の故郷、上梨村へ。

五話目

そう言つて、水樹幸一は名も知らぬ駅を離れて、街灯一つない、薄暗い田んぼのあぜ道へと消えていった。

私は茫然と街灯の下に立ち尽くすだけ。

——何を言っているのかわからなかった。

そもそも私は、あの男を追いかけて同じ電車に乗ったはずだった。なのに少し眠気が頭をよぎり、すぐに目を覚ませば、この誰もいない駅の切れかけの灯の下に、部下の荒木と共に立ちつくしていた。これは夢ではないのか。

だが何度自分の頬を叩いても、私は夢から覚めることはなかった。これは現実なのだろうか……。

身体がべとべととする。

露出した腕や首筋を伝うのは、黒い汁。

じつとりと何かに掴まれた様な跡が私の身体に浮かぶ。

まるで腐りかけた魚を体中に塗りたいくらいかのような異臭が、汁を塗りたいくらい私の身体から立ち上り、鼻を曲げる。

意識が飛びそうなほどの匂いに、私は顔をしかめつつも、街灯の向こうの暗闇を見つめる。

夜の闇の中、どこまでも広がる田んぼの景色。おおよそ百ヘクタールはくだらないであろう広大な田園地帯が広がっていた。

振り返れば、線路の向こうに更に広い田園が地平線を作っている。

——おかしい景色だった。

ぞつとするほどの違和感があった。

遠くの村落は昔ながらの田舎風景で、これだけ広い田畑を維持できるほどの人数も機材もあるようには到底見えなかった。

それに山は田園の景色を囲み遠くに見えるのに圧迫感がすさまじい。まるで一つの巨大な牢獄に投げ込まれたかのような気分だった。線路だっておかしい。

振り返ればそこには苔むした線路がどこまでも続き、山の向こう、いや田んぼ奥へと隠れてしまっている。

あれは……どこへ続いているんだ。

この先には、何があるのか。

ここは、どこなのか……。

異様だ。何もかもが、私の常識を超えている。

ここは――

「……荒木。行くぞ」

頭にこびりついて離れない焦りを振り払い、私は息を何度も飲み込み後ろに立つ荒木を呼ぼうと後ろを振り返った。

「はい、警部」

――暗闇に立つ、影が一つ。

「……」

何もない線路の上、誰かが我々を見上げていた。

まるで影の様に、ペラペラな姿の大男。

暗くて輪郭がぼんやりとしていて見えない、それなのに、はつきりと見開いた二つの目と口元だけが闇の中に白く映し出される。

ひらひらと伸びる細長い両の腕が、ヒタリと駅のホームの端をつかみ、前のめりに身体を傾け滑るように上ってくる。

口から血が滴る。

嗤っている。

暗闇の中で、誰かが笑っている――

「警部、汗が……」

「行こう。泊るところを見つけないとな」

そう呟きながら、足が僅かにすくみ、私は何かに震える自分自身に喝をいれるように拳をきつく握りしめた。

何も見えない、何も見えていない。

何も――

「あ、警部っ……」

突き刺さる背中中の視線に追われながら、私は寂れた無人駅を後にして、遠くに見える村を目指してあの男と同じ道をたどることにした。

――ジャリ……ジャリ……

夜風に潜む、濡れた土を踏む小さな足音。

遠くから、私に追いつこうと近づいてくる、大股に歩き手をブンブンと振る音が聞こえる、ニヤついた荒い息遣いを掠める。

手を振る音がどんどん大きくなる。

砂利を蹴る音が近くなる、どんどん近づいてくる。

息遣いが肩越しに聞こえてくる。

違う。

違う！

これは……これは部下の足音だっ。

これは――

――警部……

低く、呻くような囁き。

耳に絡みつき、ブンブンと大きく手を振る音が止まる。

私の手が掴まれる――

――助け……

「はぁ……はぁ……！」

気がつけば、私は暗闇の中を、逃げるように駆けだしていった。

部下の事は、すっかりと忘れていた。

二の腕には、血のりがこびりついたように、真っ赤な手形が浮かんで私の腕をつかんで離そうとしていなかった。

ジトリと血が滴る――

六話目（前書き）

おそらくこの最後は誰もが思うであろう違和感があります。そこはエロ削除の場所。続きが読みたかったらノクタンの方にある同じ奴読んでください、すいません。

六話目

村へと歩き始めたのは、およそ深夜を過ぎた頃だった。

正直、いつ深夜なのかはわからなかった。月は東の端を示していたけど、星の流れはとくに12時を超えていたからだ。

——星は朧に隠れようと、その無限の足跡を残し、果てなき旅人を導く。星に導かれなさい。

昔、大婆様の物言いが頭をよぎった。

「……はい」

大婆様の言葉を胸に刻み込みつつ、私は星の瞬きに目を細め、暗闇を速足で歩いて行く。

——カチ……カチ……

と、思い出したかのように耳元で聞こえてくる針の動く音。

(……あ、そうだ)

昔お師匠から力のこもった時計を貰ったことがあり、私はあぜ道で足を止めると背負っていたリュックを足元に下ろし、口を開いた。

——何かの役に立つかもしれない。

そう思つて、リュックから取り出したのは金の懐中時計だった。

十歳の誕生日、親同然のお師匠からもらった大切な時計。

私は暗闇の中、懐かしさに目を細めつつ、リュックを背負いなおすままに懐中時計のカバーを開いた

(……やっぱり)

狂いきった針。

けたたましく動くいくつもの歯車。

盤面の長針は右回りに、短針は左回りに高速に動き、数秒に一回の割合で二つの針が出あっていた。

やはりというべきか、時は完全に狂いを見せている。ただ、そのおかげで私自身は正確に時を刻むことができるのだ。

（……ありがとうございます、お師匠）

私は慌てふためく時計の針に、埃と呪いを払うように一息を掛けると、時計の針に手を伸ばした。

息を吹きかければピタリと止まる二つの針。

私は針を12時に合わせ懷中時計のカバーを閉じると、綺麗に時を刻む歯車の音に耳を澄ませ、鎖を指に巻き付け握りしめ、地面を蹴り再び歩き始めた。

見上げれば黒い雲間から覗かせる小さな星の光。

足元を見下ろせば、そこには暗い闇に漂う小さな光の点。

それは夜空から零れた星が光となって大地をポツポツと小さく照らすように、いくつもの光の斑点が道を作っている。

そしてその道は上梨村まで伸びている――

――ザザッと聞こえてくる不規則な足音。

「ま、待ってくれ！」

暗闇に僅かに響く掠れた声。

足を止めコートを翻すと、息も絶え絶えに掛けてくる大柄な影に、私は眉をひそめて首を傾げた。

「どしたんです島崎さん？」

リュックを背負いなおしつつ、そう言っただけで私は目の前に立ち止まる島崎さんの、今にも血の気がなくなりそうな蒼白な顔を覗き込んだ。

「……。落ち着きませんか？」

何か怖いことでもあったのだろうか……。

「お、俺も村に用事があるんだっ……嘘じゃないぞ！」

「自由……」

汗をびっしりと掻き、後ろをびったりと張り付く大柄な男に苦笑いを滲ませながら、私は再び歩くことにした。

そして村の集落が近づき、ソレと共に暗闇を照らす僅かな明りが見えてくる。

本当に小さな村だった。

なだらかだけど、雲を貫きそうなほどに大きな山を背に、二十件の木の家が山の段になった斜面の中に点々と面なっているだけだった。

一つ一つは素晴らしい——茅葺の屋根は見事に百坪近い土地を囲み、屋根は滑り台になるくらいに斜めになっている。

きれいに手入れされた各々の庭には、犬小屋や鶏小屋が設置され、柴犬が駆けまわるには十二分の広さだった。

家自体は、雨戸とふすまに覆われていて、壁というものは存外少なめで、奥からぼんやりと火の明りが零れて、闇を照らしている。

そして、うつすらと火の灯りを背に障子に人の影が映る。

こんな夜更けに、人の影が綺麗に映っている——

「……」

段々になった斜面には、数本のあぜ道と、それらを囲うように周りと同じく田畑が広がっている。その奥には雑木林。

そして、その向こうには恐ろしいほどに暗い闇が広がっている。

あの奥には、何があるのだろうか。

何が、見えるのだろうか——

「……行きましょう。宿を取らないと」

「あ、ああ……」

島崎さんは戸惑いながら私の方へと近づいてくる。

お伴の人達はどうしたのだろうか。私は村へと斜角ついた道を登りながら、不意にあぜ道広がる夜の田畑を見下ろしては目を細めた。広がる田園風景。

ぼんやりと遠くに駅の街灯が見える以外は何も見えず、例えば人の影すら、夜の闇に呑みこまれて掻き消えてしまう程だった。

恐ろしい程の分厚い闇。視界をヌルリと遮るその壁は、星の光がなければおそらく一歩たりと前に進むことは叶わないだろう。

そしてその深い闇の中に人影が遠くに二つだけ見えた。
ポツンと田畑の真ん中に立ち尽くす瘦躯の影。

そのどちらもが、ペラペラと厚みのない、まるで影の様。

ひらひらと虚空に掲げ、まるで風に倒れるススキの穂のように、
ゆつくりと大きく左右に揺れる両腕。

ギラリと見開いた眼がこちらを見上げる。

ニイと笑ってこちらを見上げる――

――食い物……。

ザッザッザッザッザッ

遠くからでも聞こえるくらい、稲穂を掻きわけ走り出す二つの足
音が聞こえてきて、私たちを追いかけてくる。

もう声は届かないだろう。

何も言えない。

ポケットに手をつ込み、零れるため息。

私はグツと帽子を目深にかぶり少し視線を落としてつつも前を向き、
民家の方へと足を進めることにした。

そして歩きながら、ポケットに手を入れる――

「聞こえてますね……」

「あ……ああ」

「……振りかえらず島崎さんは前を歩いてください」

「な……何をするんだ」

「単純ですよ……」

私がそう言つて、ポケットから取り出すのは、小さな小瓶。

大婆様やお師匠が基本的な呪術でよく使うもので、中にはブタの
血液が少量溜めこまれていた。

――獣は血を追って闇を駆ける。

大婆様の言葉が頭の中を駆ける。

先に行く島崎さんを背に、私は坂道の向こうに広がる田園風景を
前に、グツと小瓶に入った血の赤黒さに目を閉じて祈る。

――ザザザザザッ

二足歩行じゃ遅いと感じたのか、息も荒げて四つん這いになって駆けてくる二つの気配が闇の中にはつきりと感じる。

草をかき分け、地面に着いた手をドロドロにしながら、せわしく四肢を動かし、歯をむき出して何かがこちらに近づいてくる。嗤っている。

こちらを見ている。

私は呪いを込め、フウと息を吹きかける――

「……行けっ」

スッと軽く投げる振りを取って、小瓶は弧を描き、私はコートを翻し一目散に走って島崎さんの背中を押して坂道を登った。

「行つて……！」

「お、おい！」

「早く……！」

すぐ私に少し気押される島崎さんを押して、私は村の方へと逃げ込む。

小瓶の割れる音はしなかった。

その代わり、割れた小瓶から衝撃波の様なものが割れた破片と共に周囲に広がり、丈の低い草木を一斉にしならせた。

それは私が込めた、獣にしか聞こえない音。

ピタリと足音がとまる。

ソレと共に紅い血は周囲に飛び散り、薄っぺらい気配は鼻をヒクつかせながら、草むらの向こうへと散り散りになっていく。

そして山の木々の向こう、深い闇の奥の奥へと消えていく――

「……時間が稼げれば」

「ど、どこに行くんだ!？」

「あそこへっ」

私は島崎さんと共に分厚い異界の奥へと隠れる二体の影人を背に村にある、一軒の茅葺の家へと逃げるように駆けこんでは、庭を突っ切り玄關戸を叩こうとした。

「すいま――」

そう言つて戸を叩こうとして、ガラリと玄関が開く。

扉を開き、呆ける私の前に立っていたのは少し眠たそうなくらい目がトロロンと垂れたパジャマ姿の女の子だった。

吸い込まれそうなほど黒い髪。

ほんのりと熱を帯びて朱色に染まる白い肌。

幼い顔はじつと私を見上げ、少し赤い唇が半開きになり、吐息が零れる。

緊張気味に胸元に這う小さな両手。

ジトリ……

熱っぽい視線が惚ける私を貫き、無言のままややあつて年端もいない少女は恐る恐る手招きをすると、結った髪を靡かせ踵を返した。

そして土間を上がるままに、トトツと床に音を立てて廊下の奥へと消えていく。

その残り香は少し、柔らかい匂いがした。

「……入りましょう」

「し、しかしあんな子供一人の了承では……」

「では一人で宿探しをお願いします」

正直、後ろから何かが追ってきている状況下で躊躇う島崎さんにかまっている余裕はなくて、私はと靴を脱ぎリュックを肩からおろして廊下を上がった。

島崎さんかというと、戸惑いいつも私の後についてきて戸を閉める――

——ドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンド

「ひっ?！」

「……ぎりぎり」

けたたましいまでの打撃音。

戸が突き破られるくらいにガタガタと玄関が揺れ、誰かが入ろうとしている。

戸を突き破ろうと、玄関戸の隙間から指が這い出しては、黒い血

を滲ませんばかりに木の戸に爪を食い込ませる。

その指は、恐ろしい程に黒い。

僅かに開いた戸の隙間から顔を覗かせる。

暗闇の中で、ぼんやりとした顔の輪郭が隙間から覗かせ、こちらをじつと見つめ、玄関を開けようと扉の両端を掴んだ腕をガタガタと勢いよく前後に振る。

ガラガラと零れる涎。

扉を破ろうとしながら、ニイと歯茎がむき出しになる。

嗤っている。

——異国の魔術師……その力チカラチカラチカラ……カカカカカカカッ

私を見ている——

「……行きましょう」

「は……ははは……ひひひっ……」

「入る様子はないようです。行きましょう……」

腰が抜け、その場に崩れ落ちた島崎さんを横目に私は廊下の奥へと足を運ぶ。

島崎さんも四つん這いで私の後ろからやってきて、やがて大広間の戸が開いているのを見つける。

あの子が入ったのだろう。

私は床に膝を付けて腰を下ろすと、覗きこむように半開きの襖を開いては滑るように座ったまま中へと入った。

そこには比較的広い居間が広がり、囲炉裏を囲んで老婆と老人がニコニコ笑って手招きをしていた。

「おお、こんな夜更けによくきなさったっ」

老人が一人。

「おやおや……。こんな辺鄙な村までよおきなさったもんだねえ」
少し訛り声の老婆一人。

どちらも、普通の服装——現代的な服装で、くたびれたパーカーとよれよれの綿のズボン。老婆は同じくくたびれたパーカーによれ

よれのズボンを着ていた。

「あ……」

「……」

そして笑って囲炉裏を囲う二人の傍に幼い少女がちょこんと座って、ムスツとした表情で私を見上げていた。

吸い込まれそうなほど長い黒髪。

淡い光を照り返す、白い肌。

寝巻のシャツを着ていて、ピンク色が少し目に痛かった。

周りは明るい。電球は見えないけれど、どこかに人工の明りがあると思えるくらいこの居間も廊下も明るく感じた。

ただ、違和感があった。

それは彼らの――

「――水樹幸一と言います。こちらの人は島崎……」

多くは語るまい。どの道それほど懇ろになる気はないのだから。

「はあはあ……昇です。島崎昇といって刑事をやっています」

少し息を切らしながら、同じく襖を開き横に並ぶ島崎さんを横目に小さく頭を下げると、二人の老夫婦に尋ねる事にした。

「夜分遅くに申し訳ありません。こちら辺に來たものの泊るところがなくて苦労してしまって、どうか一夜限りではありますが寢床を貸していただけないでしょうか」

その申し出に老夫婦は少し互いを見比べると、二人は再び私を見下ろしては心底嬉しそうに力一杯に頷いて見せた。

「よいよい。是非とも泊っていただくさいな」

「こんな家でよろしければ何日でもいてくださいえ。家族が増えたと思える心がほっこりしますわ」

「ほら婆よ。飯の用意をしてやらんと」

「はいはい。少し待ってくださいな。……ほら柚子手伝ってくれな」
柚子と呼ばれた少女は頷いて、立ち上がるうとする老婆を支えつつ居間の向こうへと歩いていく。

そして鈍い二つの音が遠のき、私はリュックを脇に置き嗤う老人

に頭を下げた。

「本当にありがとうございます」

「いやいや。何日でも泊っていつてくだいな。祭りも近い、旅の方にも是非上梨村の事を知っていつて周りに教えてほしいんじゃよ」

「——わかりました。では、祭りが終わるまでここに居させてもらつてもよろしいでしょうか」

「おおつ、願つたりかなつたりじゃよつ」

老人は仰々しく驚いたそぶりを見せては、嬉しそうにそう言つと立ちあがり私と島崎さんの所へと近づいてきた。

そして私と島崎さんの手を掴んでは、「ささつ、火にあたりなさい。夜は冷えるだろうに」と行つて囲炉裏へと引つ張つていく。

食い込むその手は節くれだつていた。

そしてとても冷たかつた——

「……」

「あの、ご老人。少し聞きたいのですが、お名前はなんと申されるのでしょうか」

「おおつ、名乗るが遅れてもつたのお。上梨高継というものじゃ」

「上梨……この村は先ほど上梨村と言つていましたが？」

島崎さんと私を囲炉裏の周りに座らせると、老人は至極嬉しそうに語り出した。

「そうじゃ。この村で全ての者は性を上梨と呼んでおる。ワシらはひいひい爺さんの時代から性がなくての。その代わりに村の名前から性を貰つたのじゃよ。」

ワシらは昔から苦しい時代じゃつた。侍に田畑を荒らされ女を持つていかれ、家を焼き払われ——だからの、ワシらは考えたのじゃ。離れてもどこにいてもこの名前を以つて村の団結を強めようと」

「は、はあ……それよりさっきの連中は何ですか？」

——表情が曇る。

「……。はて、何のことじゃ？」

「い、いや。さっき玄関まで追いかけてきた連中ですよ。いたで

しよさつきまで」

「風の音じゃろ。ワシらにはなんも見えんかったよ」

「だ、だけどっ」

喰いかかるうと立ち上がる島崎さん。

私は小さく肩をすくめ、彼のワイシャツを引つ張っては無理やりに座らせ、とぼける老人に苦笑いを浮かべた。

「すいません。この人、怖がりでして、夜になるとよく怖い怖いと喚くんです」

「あははは、あまり夜は苦手てかの。寢床には行灯をちゃんと付けておきましょうかね」

「ありがとうございます。私は多分大丈夫ですので」

「おお、肝が据わっていますね」と言つて、老人はニコニコと笑い、私は安堵にため息を漏らした。

おそらく『彼ら』は呼べば来るだろう。暗き淵に立つ従者は光に吸われて来る、確実に私たちの隣へと。

これ以上、妙な波風は立てたくない。

トトトトツ

小走りの足音がふすまの奥から聞こえてきて、私は一息つくつと、奥の部屋から顔を出す少女を横目に老人に尋ねた。

「高継老人。いくつかお聞きしてもよろしいでしょうか？」

「おお？かしこまらんでいいぞ。旅人の話も聞いておきたいのお」

「大したことじゃありません。私たち以外に、ここ一週間でこの村を訪れた方はいらつしやられますか？」

——濁る目。

「いませんか？」

膳が私と島崎さんの前に置かれる。

老人はハツとなり、すぐさま笑顔を取りつくろいそつと私と島崎さんに「ほれ、椀が冷めてまう」と言つて催促する。

話の腰を折られたようで、私は帽子を取り小さく肩をすぼめると、リュックから取り出した竹の箸を取り出し膳の前に並べた。

と、老人はキヨトンとして私が持った竹の箸を見つめてくる。

「ほお、自分用の箸ですか」

「都会じゃブームなんですよ」

「ははあ。なるほど若い者はやはりそう血気がさかんでいいですねあ」

老人は笑みを零すと、私の膳に添えられた箸を下げるよう少女に伝えた。

私の傍に立っていた少女はエプロン姿で、ソツと私の傍に座り私の膳から箸を取ろうとしなだれるように華奢な体をすり寄らせる。小さな胸が腕にあたり、私の胸元を柔らかな黒髪がさらりと撫でる。

うつすらと人の体温が感じられる。

——生きている。

(……この子……)

ゆつくりと少女は傾けていた上体を起こし、呆然とする私の横顔を横目に見つめながら、箸を膨らんだ胸元に据える。

と、小さな手が私の手に食い込み、小さな口元の息遣いが耳を掠める——

(……九月……)

——掠れた小さな声。

(……後で……床と一緒にお願いします……)

横を振り返ると、少女は胸に箸を握りしめたまま無言のまま少し垂れた目で、ジトリと上目遣いに私を見上げる。

澄んだ黒い瞳は顔を引きつらせる私を映し、頬はどこか朱色に染まっている。

それでいて幼いその顔はどこか大人びていて——

「え……えと」

「——お願いします……」

「は……はあ」

「……」

強張った表情のまま、コクリと小さく頷く仕草。

そうして立ち上がるままに、踵を返し逃げるように去っていく少女の背中に、私は思わず口の端を引きつらせた。

そんな私を、老人は可笑しそうに笑う。

「かははははっ、柚子も変な子だのお」

「は、ははははっ、そうですね……」

互いに顔が笑っていないくて、どっと出てくる嫌な汗。

と、私を隣に座る島崎さんは首を傾げて、刑事らしい険しい顔で覗いてくる。

「……怪しいな。何を吹きこまれたんだ？」

「ほらほら、そんなお顔してたらご飯がまずくなりますよお」

そう言って今度は老婆の方が膳を島崎さんの方へと出してきた、島崎さんは膳が来るなり腹が減っていたのか勢いよく食べ始めた。

まるでイノシシが餌を貪り食うかのような姿に、私は顔を引きつらせてしまう。

「……おなか減ってたんですか？」

「おうよ、少なくともここについて七時間は何も口にしてなくてな」

——駅から村まで見積もっても一時間。

明らかに、六時間以上の差がある。

私を追いかけて電車に乗って村まできたと島崎さんは言っていたのに——どこで時間軸がずれたのだろうか。

疑問は頭の中から尽きず、私は竹の箸を手に取り老人に二、三尋ねる事にした。

「先ほどの質問ですが……他に来られた方は居ますか？」

「おおっ、そうでしたな。ワシはあまりよくはわからんが、先日二人の男と女の子がやってきたのを見たぞ」

——答えたくないわけではないらしい。

「一人は柚子くらいの子を連れた親子じゃよ」

大島光介。やっぱりこっちに来ていたんだ。

「一人はスーツ姿の男でな、この暑い最中に汗だくになりながらワ

シらの所に尋ねてきたそうだと。なんだ法律だのと小難しい事を聞いて来る」

弁護士関係の人だろうか。

大島光介はどうやら本気で私の懐にある二億円を取りかかっているようだ。

律儀なものだ。

「おや旅の人よ、なんか苦いものでも喰うたか？」

とそんな様子の私を見て、老人は怪訝そうな表情で覗いてくる。

「あ、いえ……あ、そうだと。ここの祭りってどんな事をするんですか？」

食べる気力もあまりなく、私は適当な頃合いで手を止めそう尋ねると、老人はとても嬉しそうな顔で語り出す。

「おお、そうじゃそうじゃ。旅の人に見てもらうんじゃからちゃんと言わんとな」

「ええ。お願いします」

老人は嬉しそうに語り始めた。

「そうじゃの来月あたりから神殺しと呼ばれる祭りが始まったの、その祭りの準備に今大忙しなんじゃよ。」

良ければ旅の人、準備の様子も見て言っはくれんかな？」

「神殺し？それはどんな話ですか？」

と、島崎さんがシマリスよろしく頬をパンパンにしながら尋ねるので、老人は少し驚いたような表情で笑い声を含ませながら呟く。

「ははっ、お主は良く食べるのお。……かつてこの土地にはな、色々な悪さをする神様がおった。」

神様のせいで畑は荒れ、山は崩れ、川は氾濫し、日は陰るばかり。そんな人に良い事をしない神様に対して、我々上梨村の人間は立ち上がったんじゃよ。神様をこれ以上のさばらせておくわけにはいかないと」

「ほお……妖怪退治みたいなもんですなあ」

「そうじゃそうじゃ妖怪じゃよ、あんな化け物。死んで当然じゃよ」

「は、はあ」

少し息を荒げる老人。

たじろぐ島崎さんを横目に、私は箸を布でくるみリュックに入れながら、改めて老人の話を聞くことにした。

おそらく、答えはこの物語にあるだろうから――

「神様は山の中にいたんじや。ワシらはそいつらを倒すために、外から七人の強力な助っ人を雇う事にした。

そのどれもが強い侍での、ばっさばっさと妖怪どもを薙ぎ払っていったんじやよ。そしてついに神様への喉元に刀を突き立て、ズバツと神様の喉ごと身体を一刀両断に引き裂いたのじやよ。

すごいぞつ、血がドバアアと出てな、空が真っ赤に染まって白い月までも鮮血に染まっていったんじやよ」

―― 凄い息の上がり様だった。

まるでその場で見てきたかのような――

「血の赤で空は真っ赤に染まり、大地までも真っ赤に染まった。川は血色に変わって稲穂までも赤黒く、そりゃあどす黒く色を染めていった。

…… ああ、神を殺したんじや、ワシらは神を殺したんじやよ！」

少なくともわかるのは、息を荒げ興奮するこの老人の目は、恐ろしいほどに黒く、そして濁っているという事だけだった。

怖いほどに、この男は――

「…… 神を殺して、それからどうなったのですか？」

―― ニイと歯茎に血がにじむほど、老人は嗤う。

こちらを見る目は、窪んでいるかと思えるほど、黒い。

「知りたいか……？」

「はい」

「―― そのあとはな、七人の侍は神の血肉を喰らって、新たに我々にいくつかの供え物を要求したんじやよ。

一人は神の血肉を喰らう事じゃった。

一人は神の魂を喰らう事じゃった。

一人は神を護る巫女の血肉を喰らう事じゃった。

一人は巫女の魂を喰らう事じゃった。

一人は村人全員の血肉を喰らう事じゃった。

一人は村人全員の魂を喰らう事じゃった。

最後の一人は他の六人の魂を従えることじゃった」

一人ひとりの目的を語り終えると、老人は最後に大きなため息を零すと、満足げな表情で私たち二人を見つめた。

「もちろん、ワシらは死にたくない。故にワシらは考えたのじゃ。四人目までの要求は飲もう。だが五人目六人目の要求に対して、ワシらは他に生贄を差しだそうと。

一つはこの村にいた神の巫女を含めた数人を侍に差しだし、残った数人を外の人間から集めて差しだそうと。

数はちと少ないが、数人の心臓と魂を喰らう事で六人目までの侍さんは満足してお眠りになられたんじゃ。

そして最後に七人目の侍さんが六人の侍さんを切り殺し、満足して帰られたのじゃよ」

「……それが、物語ですか」

「ああ……物語じゃよ」

——老人は嗤う。

「祭りは明日以降、六日に渡って行われる。お主らもぜひ参加してもらいたいんじゃよ」

「……ええ。是非」

私はそう言つて、立ち上がりリュックとコートを脇に抱えると、囲炉裏を挟んで座る老人に笑って頭を下げて見せた。

「食事、本当にありがとうございます。私はこれで失礼させていただきます」

「おお、もうそんな時間か」

コテンと横になる巨軀。

老人の表情が先ほどの柔らかなものに戻り、隣で箸を持ちながら眠りこける島崎さんを横目に小さく肩をすばめた。

さすがにここは眠りにつく場所ではないので、私は彼の肩を摩り起こそうとする。

——ゴゴゴ……ガガガガッ
地鳴りのようないびき。

既に深い眠りに入ってしまったい、島崎さんはピクリともその表情を動かさず、ただ大きく口を開くのみであった。

「彼はワシの方で介抱させてもらうよ。君は先に休んでおきなさい」
「……。わかりました」

——まだ儀式ではない。

ヘタな事はしないだろう、そう思いつつ私は眠る彼の肩にコートを掛けると小さく頭を下げた。

「では、先に休ませていただきます。今日は本当にありがとうございます」
「います」

「ふふっ、構わん構わん——柚子っ」

呼ばれるままに廊下側の襖が開き顔を出したのは、黒髪の小さな少女で先ほどのエプロンは外して、最初に会った時の寝巻が露わになっっていた。

ちょこんと正座の小さな躯体。その代わりにくりんとした黒いめ目は大きめで、ジトリと私を見上げている。

何か言いたげで、唇からこぼれる吐息はとても熱く——

「……」

「寝室まで送りなさい柚子。……よいな」

「——はい……」

コクリと頷くままに柚子と呼ばれる少女は立ち上がると、リュックを肩に担いだ私の下へと歩み寄る。

小さな指が戸惑う私の手をクツと握りしめ、引っ張って廊下を出ていこうとする。

ふすまを抜け、私は居間を出ようとする——

「ようやく揃ったか……」

——嗤い声。

私はハツとなつて立ち止まり、襖の奥へと視界から消えようとする老人へと振り返ろうとする。

老人のニヤけた顔が、暗い廊下の向こう、居間から覗かせる。

「――」

「……来て」

――澄んだ、山の水を喉に通すかのような、心地いい声。
クイツと腕を引つ張られる感覚。

胸に噛みつく焦りが、それだけで引いていき、私はこちらを見上げる少女と目を合わせては、澄んだ黒い瞳に思わず頷いた。

訴えるような、強い意志を感じる。

まるで闇に光る月の様な、透き通った心が見える。

「お願い……」

「……わかりました」

取り乱した自分が少し恥ずかしく思え、私は腕を引つ張る少女の険しい表情を前に、手持無沙汰に頭を掻いた。

そして少女に連れられるままに奥の部屋へとやってくる。

畳の匂いを感じられる、とても良い部屋だった。

（……いい匂い）

広い部屋。多分、数えれば八畳はある。寝るには本当に広い空間だった。

薄暗い部屋の隅には行灯が灯り、ほの暗い周りがうつすらと茜色に染まる中、私の影が壁と襖に映し出される。

部屋の中心には布団が一式敷かれ、その隣には来客用の浴衣が置かれていた。

正直有り難かった。

リュックの中には他の用意ばかり持ってきたので替えの着物はなくて汗臭さに困るだろう感じていたのが正直なところだった。

私は嬉しさに頬を綻ばせ後ろを振り返ると、廊下に立っている黒髪の少女の濡れた瞳を見下ろした。

「……」

じつと見つめる黒い瞳。

少女は片時も離さず私だけを見つめ、私は照れくさくなって視線を落とし、彼女に小さく頭を下げた。

「えと……ここまでしていただいて、本当にありがとうございます。
……柚子さんでしたっけ？」

「——コウイチ……良い名前」

「ありがとう……」

私の言葉を返す様に、世辞をくれる少女に私は照れくさくて頭を掻くそぶりを見ると、さつさと部屋に入ることにした。

そしてリュックを布団のわきに置き、布団の上に座ると、汗臭さの残るシャツを脱ぎ薄闇に裸をさらした。

そしてズボンのベルトを取ろうと金具に手を添える——

——スルリ……

畳の擦れる、小さな音。

それは誰かの足音。

だけどその気配はいやなものじゃない。

むしろ、心が穏やかになるような——

「……コウイチ」

晒した私の背中まですり寄ってくる小さな気配に、私はベルトをはずしながら、眉をひそめつつ後ろを振り返ろうとした。

ヒタリ……

背中を掠める指の感触。

私はギョツとなって後ろを振り返ると、無言のままそつと背中に頬を寄せる柚子さんに思わず体を強張らせた。

「ゆ、柚子さん……」

「……大きな背中……」

「えと……傷だらけですから……あまり感触はよくありませんが」

「うん……知ってるよ……」

「え……？」

「……。大きくて……あつたかい」

囁く優しい声に、私は戸惑いつつもそんな素っ頓狂な事を答えてしまう。

と柚子さんは、頬を擦り寄せるままに顔を肩に乗せると、私の首筋にカプリと噛みついて胸元を背中に寄せる。

熱っぽい息遣いが耳元を掠める。

傷を撫でる手が熱くて少し緊張して、興奮している――

「……コウイチ……あなたと身体を重ねたい……」

「柚子さん……冗談は……」

「――九月の月明かり……」

――悲しげに囁く声。

「五月の萌ゆる大樹の葉……神様が残してくれた……最後の力……」

「柚子さん……」

ギョツと肌に爪が食い込む。

コツリと汗のにじむ額を背中に押し付け、囁く声を苦しげに震わせ、柚子さんは私の身体にしなだれる。

熱っぽい息使いが背中をなぞる。

指が私の胸元を撫で、抱き寄せるようにほっそりとした腕が私の胸を周り、柔らかな感触が肌を伝う。

苦しみが流れてくる――

「……どんなことをしても……」

私は背中を少し丸め、少女のすすり泣きにゆっくりと目を閉じる。息を吐き出し、暗闇に心を広げる。

泣きむせぶ少女が暗闇に立っているのが見える――

「私の身に何があっても……私は神を蘇らせる……」

「はい」

「私は……私たちは……奴らを滅ぼさないといけない……どんな事を犠牲にしても……何もためらうことなく……必ず……」。

でない……この悪夢は終わらない」

「……由々子さんの妹さん、ですか……」

「――神事の巫女……神の言葉を、あなたに残します……受け取っ

てください」

胸を這うほつそりとした腕がスルリと離れていく。

少女は肩を縮こませたままゆつくりと立ち上がり、行灯に照らされた薄暗い壁に映る彼女の影が揺れる。

シュルリ……

耳元に聞こえる衣擦れの音。

胸元の露わになったくびれた影が壁に映し出され、少女は僅かに膨らんだ胸元を両腕で覆う。

朱色に染まった頬が行灯の明りに照らされ、濡れた唇が桃色に染まる。

聞こえてくる、熱っぽく零れるため息。

ギョツと白い肌に爪を食い込ませ、少し恥ずかしそうに視線を反らしながら、少女は項垂れる私の背中を見下ろす。

「……こつち……向いていいよ」

「ん……」

「あんまり、色っぽくない……ですけど……」

「……私で……よろしいのですか？」

「——お姉ちゃんが……選んだ人ですから……」

「……」

「異国の魔術師……呪術師……私の全て……あなたに捧げます……」

スルリと布の擦れる音がする。

トクン……胸を掻きむしりながら心音が跳ねる。

——童貞なりの覚悟を決めよう。

大きく零すため息。

私はいくばくか躊躇いを覚えたものの、恐る恐る振り返ると胡坐をかきながら、目の前に立つ柚子さんを見上げた。

行灯に灰明り照らされた肢体。

白い肌が揺れる明りに照らされながら、うつすらと朱に染まり汗を滲ませている。

まだ幼い身体には膨らみを覚えた胸元が、覆った両手の向こうに

覗かせ、下には生えかけた産毛が見えた。

腰のくびれを艶めかしく覗かせ、ゆつくりと跪く華奢な身体。
ほんのりと頬を染めながら、ジトリと垂れた黒い瞳が上目遣いに
覗き込むように、たどたどしく私を見つめている。

「……あなたを……待っていました……」

「柚子さん……」

漂う視線は少し緊張し、唇はうつすらと開いて小さな舌が見える。
私を見て、微笑み、ちいさな身体が私に覆いかぶさる――

「……キス、してください」

小さな顔が近づき、呟く唇が塞がれ、ほっそりとした腕が首に絡
む。

行燈に揺れる薄明かりの中、影が交差して重なり、私たちは熱を
奪いあった。

彼女の肢体が闇の中、白く映った――

「九月……五月……あなたに捧げます……私の言葉……私の……」
身体を強く重ねる彼女の声は、とても艶めかしく胸に響いた。

「コウイチ……大好き……」

とても綺麗だった――

六話目（後書き）

いや本当にすいません。本当はエロなしをこっちにupするつもりはなかったんですが。どうしてもなんらかの反応、感想が欲しくて……すいません。本当に。中身のない褒め殺しで舞い上がって、結局そんな言葉に意味なんてなくて……僕が伝えたかったことの……も伝わってないなんて……なんで小説書いてるんでしょうか私は。

七話目（前書き）

愚痴垂れてすみません（＊、ω、＊）

七話目

「……。大丈夫ですか？」

朝。部屋から出でようとズボンのベルトを腰に通しながら、私は後ろを振り返り、少し心配を声に覗かせ尋ねた。

コクリと僅かに頷く仕草。

肌に寝巻を羽織りながら、胸元を手で押さえる柚子さんを横目に、私は少し気まずさに髪を掻きむしってはリュックを背負った。

「早く戻った方がいいかもしれませんね……」

「……早く、戻るつもりだった」

少し恨めしげに零れる声。

柚子さんはヨロヨロ立ち上がるままに、少し股を痛めたように内またにして歩きながら私を上目遣いにジトリと見つめる。

その目は昨日と変わらず綺麗で、私は吸い寄せられるように彼女の髪を撫でた。

「その、すいません……柚子さんは可愛いですから」

「——帰してくれなかった……」

「ん……でも僕、引きとめましたっけ？」

「……いじわる……」

耳まで真っ赤になる顔。

プクツと頬を膨らませるままに結った黒髪を翻すと、柚子さんはパタパタと廊下を慌てて走り去ろうとする。

——白い肌に食いこませる爪。

立ち去ろうとする彼女を止めると、私は少し真剣な表情で、キョトンと目を丸くする彼女の顔を覗きこんだ。

「……コウイチ？」

「——私は、ここに来た人達と、村に殺される人達全てを救いたい」
「……。大丈夫……コウイチは、安心して神様を救って」

「あなたも……そうですね。必ず、外に連れ出して見せます」

「ありがとう……コウイチ」

——嬉しそうに少女は笑った。

とても柔らかい笑顔だった。

スルリと手の平からすり抜けていく小さな腕。

胸にギュッと手を添えながら、ひらひらと小さく手を振ると、少

女は仄かな笑顔を滲ませ、小走りに廊下を走っていった。

俯きながら走るままに、朱に染まる白いうなじが目に映る。

「——綺麗だなあ……」

「お、起きたのか」

ドクンと跳ねあがる心臓。

今更ながらもたげる激しい罪悪感に、私は廊下に立ちつくしたまま青ざめきつた顔を引きつらせつつ、恐る恐る後ろを振り返った。

そこにはふる上がりなのか湯気を立ち上らせる浴衣姿の島崎さん。

「……どしたよ。風呂でもはいらんか？」

「い、いえ……その」

怪訝そうに首を傾げる彼に私はだらだらと大量の汗を滲ませながら、無理やりに笑顔を作りおろおろと後ずさる。

そんな様子に島崎さんは濡れた頭を拭きつつ眉をひそめてにじり寄ってくる。

「おい……」

「はい……」

「——まったく何やってんだか……」

「大したことじゃなくて——あ、そうだ。島崎さん僕のコート役に立ちました？」

「ん？ああ、お前のか、ありがとうな。夏場にコート着ているからどんな変態だと思ったが中々いい奴じゃないか」

「あはは……さいですな……」

乾いた笑いを浮かべる私を横目に、島崎さんはトントんと上機嫌な様子で居間に向かって廊下を歩いていく。

「まあいい。それより荒木がこっちに来ているかどうか確認しないとな。夜があまりに暗かったからおいてきてしまった。」

まあ、それより何より飯だな」

「……あの部下ですか」

——確かに、瓶を投げた事も気になった。

あの後、どうなったのかも。

「そう言えばこのばあさんの話だと、昨日あたりに来た連中が別の家に泊めてもらっているそうだ。」

名前は、おそらくお前も知っているだろう」

「大島光介さんですね」

「なんだ知ってるのか」

「一緒に聞いてたじゃないですか。寝てたんですか？」

「……確認だよ」

少し詰まらなさそうな表情を浮かべる島崎さんに苦笑いを含ませながら、私は居間へと赴く彼の後ろについて歩いていく。

「それでな、俺は飯を食い終わったら部下と合流して彼らと少し話をしたいんだ。少し気になることもあってな」

「……島崎さん、僕の事だけを調べていたわけじゃなかったんですね」

「これでも刑事なんでな……」

と、言いながら少し暗い表情をするあたり、昨日の部下をほっぴり出して逃げてきたことを悔やんでいるんだろう。

ただあの表情から見れば、部下の荒木さんは死んでいないと考えている。

ただ、あの闇の中で、生きている人はそういない気もする。

我々呪術師ですら、異界の深淵の中を火種なしに歩くことは難しいし、普通の人間はなおさらだろう。

ただ、もしかしたら――

「そう言えば、お前はどんな契約をしたんだ？」

思案にふけていた私を呼びとめるようにそう言って振り返る島崎さんに、私はハツとなつて顔を上げた。

「？何のことです？」

「大島由々子とどんな仕事の話をしたつてことだよ」

少し呆れたような表情を滲ませる島崎さんに、私は苦笑いを滲ませると、肩からずれおちるリュックを背負いなおす。

「多分、聞けば呆れますよ……」

「行方不明になつた人間の目的なんて、知つておいて損はないからな」

「この村の事について調べてほしいつてことです」

「なるほど……あんたはだからこの村に来たわけだな」

合点がいったのか少し表情が明るくなる島崎さんに、私は表情を曇らせ更に言葉を続けようとした。

「そして——」

と、開く廊下脇の襖。

——顔を出すのは、しわがれた老婆の顔。

ニイと綻ぶ口元。

婆は両手を添えゆつくりと襖を開き、身体を覗かせるとあるいてくる私たち二人を視界にとらえては、ニッコリと笑つた。

そして顔をしかめる私を捉え、更に笑みを深める。

「……今の話、何を話していたんですか？」

「……」

「何を話しているんですか？」

老婆はゆつくりと襖の奥から身体を引きずり出してこちらに近づこうとする——

「単なる世間話ですよ婆さん。我々はおあつてそう間もないからですね、コミュニケーションはとっておきたいというのが入つてませんよ」

そう言つたのは島崎さん。

ムスツとする私の前に立つては、彼は快活な笑いを見せつつ、老婆の前に立つてはその小さな体をくるりと回転させ背中をさするように押した。

「ささつ、居間に戻りましょう。結構いい料理を出してくれると期待しているんですから」

「ふふつ、持ち上げたって何も出やしないよ」

「わかってますよ」

「じゃあ、居間で準備して待つてるから早く来るんだよ……」

そう言っ出てきた襖の奥へと消えていく、丸めた小さな背中。

私は小さくため息を零すと、驚いたように目を丸くしつつ、襖の向こうに隠れる老婆に手を振る島崎さんを見つめた。

ニイと不敵に零れる深い笑み。

ゆっくりと後ずさるままに、立ち尽くす私の下へと歩み寄ると、

島崎さんは少し表情を強張らせた。

「……一応、これでいいな」

「島崎さん……」

「刑事の勘じゃない、人としての純粹な警戒心だよ——この家の連中は少しおかしい。お前と懇ろになったあの穰ちゃんはずつだが」

「……なんでばれてるんですか……」

「汗臭いんだよアホが……どうせ朝まで猿みたいにやりまくったんだろつが」

「……」

「何か目的があるのか知らんがあえて聞かんぞ。刑事としてはさつさとワッパ付けておきたいところではあるが」

「——すみません……」

「お前はこれからどうするんだ？」

「——村の儀式を止めたいと思います」

声を潜ませる。

誰にも、聞こえないくらいに深く、低い声で——

「……具体的には何をするんだ」

表情を強張らせる私の様子を察したのか、島崎さんは私のそばに更に近寄ると、険しい顔を更に険しくして声を潜ませる。

少し脂ぎった顔が近づいてきて、昨日の柚子さんと比べても天と地の差なので、かなりげんなりとした気分になる。

「……えと…… 12の言葉を探そうと思います」

「……？12の言葉？なんだそれ」

「村に廃れてしまった儀式の真相を記した言葉です。……それがわかれば、おそらく儀式を止める事が出来るかもしれない。

大島由々子さんはそう言ってくれました」

「……どんな言葉だ？」

——喰いつきがいい。

私はハツとなつて顔を上げると、徐に私から離れて浴衣の胸元に手をつ込む島崎さんに、思わず眉をひそめた。

そして島崎さんは胸元から手を取り出す。

そして差し出した手のひらには、二枚の紙屑が握られていた。

「……これか？」

「……どうして……」

「——ビンゴかよ……」

私の反応を察してか、島崎さんは嘆くような表情を滲ませ、惚ける私に二枚の紙を無理やりに握らせた。

そして踵を返すままにクシャリと濡れた神を掻きむしり、深いため息を零す。

「それはな…… 田島の家に行つて調べたときに出てきたものだ」

「……」

「アイツ、少し前から家にいなくて俺が寮に出向いてもいなくて……その代わりに机に丁寧に置かれててな」

「もう一枚は…… あなたですか？」

「——ああ。電車の中で、気が付いたら手に握っていたんだ。中を見たら田島の家に出たのと似たような言葉、のようなものが書いてたんでな」

「……」

「単なる偶然だとも考えた——ただ、こんな所に俺達が迷い込んだのを見るあたり、もっとシビアな考えを持った方がいいな。」

お前の言うとおり、いや大島由々子の考えている通り、村を調べ、儀式とやらを止める術がないとここから出られない」

「……リ-alistですな」

「刑事だから……」

自嘲気味に笑う島崎さん、クシャリと苛立ち紛れに髪を掻くと、ひらひらと手を振って居間の方へと歩いていく。

「俺は俺なりに、村や脱出方法でも探してみるよ。あんたは好きにやってくれ。コートは俺の部屋にあるから好きに持って行け」

「——何かあれば、最初の駅で会いましょう」

「駅？」

「あそこは、こちらと向こうを繋ぐ場所です。周りに気づかれにくい」

「——了解だ」

「後でこっちの道具を渡しておきます。多分探索しやすいでしょうから」

「おう」

そう言って居間の奥へと消えていく島崎さんの背中を見送り、私は徐に手の中にあつた二枚の紙を覗きこんだ。

一枚目は、すごく湿った感触を帯びた、懐かしいアジサイの香りがした。

それは命を育む匂い。

森と山が生きようとする、強いくらいに感じる——
「……行こう」

グツと二枚の紙を握りしめポケットに突っ込むと、私はコートを取りに島崎さんの部屋へと赴くことにした。

まずはこの村の『時間』を解かなければならない。

そして消えた半身と喰われた半身。

目星はある程度、付いている。

後は顔を出してもらうだけ。無理やり引きずり出そうとすると、神はいやがって私の手から離れるだろう。

そのためにも12の言葉を探さないといけない。

そして12の言葉の内、あの言葉を探さないと。

八話目

飯を適当に平らげ、私、島崎は早速外に出る事にした。

「では、少し村を見回らせてもらいますね」

「おうつ、辺鄙な村だから事件なんかありやせんがね」

「あははっ、今は刑事じゃありませんよ」

そう言つて二人の老夫婦に見送られるままに私はここに入つてきた時とは違い、一人玄関に一步を踏み出す。

坊主は後から出るらしい。

まあ同じように出れば向こうも警戒するだろう。警察としても二人でつるんでいる時よりも、一人でいるときの方が尾行しやすいものだ。

群衆心理という奴だ。

おそらく私が一人で歩いているときの方が、周りも尻尾を出しやすいだらう。

（まあ……何を見つけると言うわけではないんだがな）

そんな事をぼんやりと考えながら、私はあの時、へっぴり腰で脱いだ靴のひもを結び、小さな鞆を手に立ち上がる。

そして、玄関の戸に手を掛ける。

——確かに刻まれた、爪の痕。

クマか獣かと思えるほどの鋭い四つの爪跡が玄関戸の取っ手のあたりにくつきりと刻まれ、木屑がはらりと落ちる。

（……アレは、確かにいた）

目を細めながら、瞼の裏に掠める黒い影の男。

暗闇を走りながら感じた、人ならざる気配。

後ろから見つめる、ニヤけた視線、獣の様な息遣い——

「……では、少し行つてきます」

「おおつ、行つてらっしゃい。儀式は今日の夕方やるからのそれまでに戻つてこいよ」

「わかりました」

——夕方に儀式。

どんな事をするのか、一体何が起きるのか。

そんな事すらわからないが、儀式の事を考える坊主の顔と目を見る限り、相当ヤバい事をやるのは明白だった。

大島由々子がおそらく消されたのは、そこら辺が原因だろう。

(……この連中も一体どんな顔を持っているんだかな)

私はグツと玄関度を開き、途端に晴れ渡った青空から零れる日差しに目を細める。

その日差しは痛いほどに肌を差し、昇る入道雲が、どこまでも広がる田畑の向こう、雄々しい山から昇ってくるのが見える。

空は見事に晴れてどこまで蒼く、山から吹き下ろす風に木々がいないている。

ミンミン……

聞こえてくるのはセミの鳴き声。

溶けるような熱が体をむしばむ。

まるで八月の陽気だった。

「……くそつたれ」

いつ間にか夏がやってきた事に激しく苛立ちを覚えつつ、私は民家を後にして、長いあぜ道を最初の駅に向かって歩いていく。

老婆と老人の話では、この村の村長の家に、大島光介達が泊っているらしい。

坊主の方にもソレは伝えたいし、後で私も行こうと思う。

それよりも、気になることがいくつかあった。

——いや、残ってきてしまった、という方が正しいだろうか。

夏の暑さは容赦なく半袖の私にも日差しを浴びせかけ、汗がどつと噴き出る。

ポケットからハンカチを取り出し影を作れど汗は止まらず、私はあぜ道を降りながら気晴らしに周囲の景色を見渡した。

「……いかれてやがる」

——そこはまるで、楽園のような場所だった。

段々畑の向こうには、まっ平らな平野が広がり、埋め尽くすばかりの青々とした稲穂が風に揺れていた。

地平線を作るほどの青い稲は、思わず海に見える程広がり夏の風に波紋を浮かべ、張った水が僅かに波立つ。

あぜ道が碁盤の目を作るだけで他には何もなく、田んぼと水と空だけがあった。

それだけだった。

子どもの姿も、鳥の姿も、鳥を寄せ付けないカカシの姿もなにもなかった。

あぜ道を歩きながら周りを見渡せば、脇の水路には並々と水がそそがれ、静かに音もなく流れているだけだった。

澄んだ水。これだけ透明度が高ければ何らかの生物がいてもおかしくない。

なのに小石や泥が敷き詰められているそこには、何もなかった。水の中にいるはずの力エルや小魚の群れ。果ては藻やコケすら、私が見つめるあぜ道の水路にはいなかった。

綺麗な水だけ。

そして、いつ整えられたかもわからない、無数の稲穂のみ。

他には何もない。

そこはまさに、楽園だった。

「……くそつたれ」

楽園に唾を吐きかけ、私は肩に下げた鞆からたばこ一箱を取り出すと、一本引きずり出して口にくわえる。

ライターは……ポケットにあった。

暑い最中、日をつけるのは正直気が引けるが、構わず火をつけ、私は煙草の煙をくゆらせつつ、あぜ道を遠くに見える駅に向かって歩いていく。

——島崎さん。火や煙は持っていますか？

出る前に言った坊主の物言이었다。

——火や煙を獣はいやがります。何かあれば、火と煙を使って逃げてください。

そう言ってくれたのは、ペンライトとペットボトル一本分の灯油と、火のつきやすい布切れが数枚だった。

木の棒でもあれば立派な松明の出来上がりだろう。

おそらく坊主は昨日のような状況が起きる事をハッキリと理解したうえで、ある程度用意してこの村に来たのだらう。

それはこれから続く事を予想している——

（大したもんだ……）

煙草をくゆらせながら、坊主の真剣な表情を思い出し苦笑いを滲ませつつ、私は駅の改札をぐぐりホームへと出た。

そして、誰もいないホームを見渡す。

どこから電気を貰ってるのか分からない街灯が数本だけ立つ無人の駅には、ベンチと錆びついた駅名の看板があるだけ。

錆びついている——

（……ここだけ、時間が動いているように感じる）

——坊主が言った事はそう言う事だろうか。

ホームの向こうを覗けば、苔むした線路が見え、時の流れを僅かに感じる。

彼の言うとおり、ここが『境界』と言うのだらう。

「……」

顔を上げ線路の向こうを覗けば、田んぼの海へと路線が途切れているのが見える。

反対側には、同じく線路が山の向こうへと消えていく。

（……なんだよあれ？）

ジワリと滲む視界。

陽炎のようにユラリと景色が揺らめくとともに熱っぽさが頭から全身を伝い、私は頭を振るとハンカチを頭に乘せながら後ずさった。そしてため息をつきながら日陰のあるベンチへと腰を落とした。

（……あの坊主、コート着てたよな……大丈夫か）

どこかとぼけていて、時々妙に鋭い顔をするあの青年が頭の中に浮かび、私は苦笑いを浮かべ、深いため息を零した。

そして日陰の中から夏の暑さを見つめつつ、俯きがちに煙草の灰を落とす。

ポトリとまだ熱を持った灰が足元に落ち、煙がゆっくりとくゆるままに頂垂れる私の頬を掠めた。

深いため息が、自然と零れた。

暑さにやられながら、視線が自然と周囲を漂った。

カサリ……

風の音もしない不気味な静寂の中、僅かに紙が地面を擦る音が近くから耳元までハッキリと届いてきた。

(……ああ。そうだ)

——行きの列車、紙を持っていたのは、俺だけじゃなかった。

俺と一緒に降りたあいつも、確かに持っていたはずだった。

あの時、列車の風に煽られて紙が吹き飛ばされたのも、なんとなく覚えている。

ここにアレがある。

私は立ち上がり、炎天下の下ベンチの下を覗きこむと、薄暗い中にグツと手をつ込んだ。

そして地面を手で撫でながら、目当ての物を探す——

クシャリ……

手に掴む紙屑の感触。

私は慌てて手を引っかくと、立ち上がるままに手の中にある紙屑を拾い上げた。

「……？」

——それは確かに紙屑だった。

何も書いていない、ただの——

「……違うのか？」

ビリッ……

僅かにだが、静電気が紙を掴む私の指先を走った。

私はビクリと手を震わせると、慌てて手を離し、紙屑を放り投げた。

ザアアアア……

いなく草木。

稲穂が一斉に穂を垂らし、風が背中から走り抜けていくままに私
が手放した紙を空へと持っていつてしまった。

私はそんな紙屑を茫然と見つめていた。

（……違ったのか？）

——ヌルリ……

刹那、足首をつかまれる感触。

足元を見下ろせば、そこにはぐっしりと濡れた『腕』があつた。

ガシリと足首を掴みながら、スーツの裾を黒い泥に濡らしながら
誰かが、私をベンチの下へと引っ張ろうとしている。

そのスーツの色は、泥にまみれながらも、どこか覚えている——

「……荒木か!？」

——け……警部……。

地の底から響いてくるような、低く掠れたうめき声。

首をもたげる、おぞましい程の黒い恐怖。

（この腕、どこから伸びているんだ……）

ゾクリと背筋を震わせながらも、私は顔を引きつらせつつ、私は
恐る恐るベンチから伸びた腕を両腕に掴む。

滑りながらも腕に爪が食い込み、泥に手を濡らしながら私は腕を
引っ張る。

「がんばれ……早く出て来い」

ズルリ……ズルリ……

衣擦れの音と混じって肉を引きずる音が聞こえ、腕を引っこ抜こ
うとするたびに骨が地面にあたるような感触を覚える。

——考えるな。

こんな狭いベンチの下に人が入るのか。

この狭いベンチの下の向こうには何があるのか。

——考えるな！

この薄暗い闇の奥に、何が——

——見るな！

ズルリと肉の擦れる音と共に『腕』を引っ張り、大きな人影が上半身だけベンチから夏の炎天下の下へと姿を現す。

「ひっ……………」

ボトリ……

零れおちる眼球。

ごっそりと抜け落ちて地面に散らばる髪。

頭の皮膚がドロリと水のように溶けて地面に黄色い染みを作り、真っ白な頭蓋骨が夏の日差しの下に露わになる。

「け…………けいぶううつ……………」

グツともたげる首の筋は食い破られたようにボロボロに削ぎ落ちてプラリと肉筋が宙に垂れて、血飛沫が後ずさる足元まで滲んでくる。

顔には、ドリルで骨ごと割り貫かれた様な小さな穿痕が無数に浮かぶ。

窪んだ両の眼が、後ずさる私を見つめる。

ボロボロに食いちぎられた腕が私の手をつかむ——

「け…………けいぶ…………助けて……………」

「荒木…………お前…………お前……………」

一瞬だった。

——ぎゃあああああああ！

残響となって空に掻き消える悲鳴。

私の手を掴んだ手が手首から引きちぎれ、血しぶきを空高く上げながら、荒木の上半身が再びベンチの下へと引きずられ消えた。

グシャリ、グシャリ…………

咀嚼するような音がベンチの下から聞こえる——囃るような、激しい音。

——助けて！助けてええええ！死にたくないよおおお母あああああああああん！

深い、闇の奥から、聞こえてくる――

「はあ……はあ……はあ……！」

——荒木さんと、田島さん……二人ですか……。

熱波と恐怖に薄れかけた意識の中、不意にあの物おじしな青年が話した事が頭の中で自然と繰り返された。

——島崎さん。彼らは、生きています。

ソレは絶望するに値する言葉だった。

——しかし、それは人としてではありません。おそらく人間の枠の外として生きている。

頭がボオっとする。

私は息も絶え絶えに、ふらつきながら膝を押さえ立ち上がると、腕にしがみついた手を振り払った。

ボトリと肉が地面に転がる。

ジワリと広がる赤と黄色の溜まりに、肉塊が浮かび私を手招きする――

——大婆様は彼らを総称して『異人』と呼んでいます。

「……『異人』……田島も……」

——大なり小なりありますが、彼らは、もう人ではありません。おそらくあなたを襲うでしょう。

「……」

——島崎さん。彼らを見つけても近づかないように。……彼らはもう人として生きられません。

「——くそ……くそっ」

何も取れず、何も得ることができず、私は晴れ渡る青空を見上げ、唇を噛みしめた。ただ立ちつくしていた。

それだけしかできなかった。

ドロリ……

血だまりの紅へと千切れた手が溶けて消える。

そしてどこへ吸い込まれていくわけでもなく、スウと血溜まりも小さくなっていき視界から消える。

そして何もなくなり、再び吹く風が耳を掠めていく――

――神……神が蘇る……神が再び蘇る……。

風の中に聞こえる声。

ハツとなつて後ろを振り返れば、そこには人の影。

横から見ればペラペラに見えるほどの人の影が切り出された様な人間が数体、視界を横切り、線路を歩いていった。

――神よ……神よ……神よ……！

ペラペラの顔に浮かぶ見開いた二つの目。

ニイと白い歯をむき出して笑った口元。

青空の日差しに照らされながら、化け物は黒々とした輪郭を景色に滲ませゆつくりと行列を作り、線路を歩いていく。

『異人』と呼ばれる生き物が田畑の向こうへと消えていく――

「……」

見たところ昨日のような敵対の兆しはない。

後についていこう、とも考えたが、或いは私では、田島や荒木と同じようなことになるのは目に見えていた。

それよりも気になったことがあった。

（……神）

昨日の爺さんの話は、うつらうつらと眠気の中でなんとなく覚えている。

爺さんの話だと、神は殺されたはずだ。

その神を蘇らせるというのだろうか。

或いは――別の『神』か。

（……オカルトだな）

ただ、そんな悪態について目の前の現実を否定するだけの余裕もなく、私は行列を作り田畑の地平へと消える『異人』を横目に踵を返した。

バチリッ

手に走る静電気に、びりびりと何かに触れるたびに、いや金属に近づくだけで右手の肌が無数の剣山に突き刺されているかのような痛みが走る。

それでも私は改札を抜け駅を出て、あぜ道を走る。

おそらくこれが――

「……くそッ」

九話目

グツと一枚目の紙を握りしめ、目を閉じるままに息を吐き出す。

暗闇に火を投げかけ、自らの魂を灯火と化して深く霧めいた闇を引き裂き、神が与えたもう『12の言葉』を見出す。

「六月の雨、厚き雲が山へと迫り、森騒がしくささめき立てる。枝葉重さに折れ、大地に腐り命を育む」

トクン……。

祈るように絡めて閉じた両手の中で何かが溢れだす。

ゆつくりと目を開き、両手を開き、覗きこむ――

「川は勢いを増し、森羅を流し、万象を生む。命を奪いはぐくむ雨の滴よ、命と共にあれ。命と共に生きよ」

『言葉』が魂にきつく刻まれ、私の心を強く締め付ける。

闇の中に、光を見つける。

それは溢れんばかりの水の龍を纏い、滴らせた水晶の球体。

闇に立ち尽くす私を映す――

「よしっ」

指の間から零れおちる雨の滴。

手の中にはビー玉程度の大きさの小さな水の球体がふわふわと浮かんでいて、ぱたぱたと水が滴り落ちていた。

零れる滴は手の中で池を作れど、たまることなく無限に水を大地に満たしていく。

それはまるで雨のように――

「……六月、目を覆う雨滴……神の言葉」

ギュツと閉じるままにそう呟けば、スウと手の平の中に雨の滴が、私の身体へとしみ込んでいくのを感じる。

ヒタリ……ヒタリ……

耳を澄ませば、魂に雨音がささめく音が聞こえる。それはまるで雲が歌を奏でているかのように――

「これで五つ。後七つ……」

まあ、肝心の二つが見つかっていないので、これでは正直勝てる見込みどころか、脱出できる見込みも危ういのだが。

零れる深いため息。

村の裏手の山。

麓から少し登ったところの雑木林の木々の根元に腰を落としながら、私は帽子を脱ぎ疲労感に少しため息をもらした。

見下ろせば、夏の日差しに青々と照り返す、およそ関東平野程の広さはあろう田畑の平原。

手前には、南に昇りかけたぎらついた太陽の下に佇む茅葺屋の家の群れ。

（……もう二時間も探したのか）

島崎さんが柚子さんの家を出てから少し経って、私も家を出て駅に戻る島崎さんとは逆方向の山へと昇ることにした。

正直なところ、島崎さんには大島光介さん一行の動向を探って欲しいのだが――

（……部下を二人程失った手前、何か彼らの手掛かりを持っていないと気が済まないのだろう……。わからないでもないし……誰かを失う事は怖い）

――不意に、胸をよぎる痛み。

「……え」

ズキズキと指先まで伝う、甘い熱。

苦しくて胸を押さえながら、瞼の裏を黒髪の少女の後ろ姿がよぎり、私は払うように首を何度も振る。

それでも、頭の中に少女の少し照れた顔が頭に映る。

行燈に照らされた薄暗い部屋で、ほっそりと両腕を首に絡めてきつく白い肢体を寄せる小さな少女の笑顔が頭に映る。

胸が痛いほどに締め付けられる――

「……なんだろう……この気持ち」

今まで、感じた事もない感情が胸を渦巻いている。
ホツとするような、それでいて切なくなるような、冷たい気持ちと熱っぽい気持ちがぐるぐると渦巻いて混ざり合っている。

その中心に、あの女の子がいた。

――彼女は、僕にとってのなんなのだろう。

ぼんやりと考えるままに深いため息が零れ、私はコンコンと額を何度か小突いては彼女の事を忘れようとした。

（……彼女だつてこの儀式を終わらせるために必死なんだ。僕も頑張らないと）

それでも、胸の痛みは止まらない――

（……島崎さん、彼は……大丈夫だろうな）
零れる深いため息。

クシャリと髪を掻きむしり、私は枝葉から零れる日差しを見上げ、彼女のことを少し頭の隅におくことにした。

とりま、彼は僕の所に戻るだろう。

大丈夫、釘は差してあるし、心配はない。

彼が不用意に『異人』に接触することはないだろうし、そう何時間も彼がこの村で単独行動をするとも思えなかった。

あの人は、多分怖がりだから。

（……まあ後、こっちの問題か）

そう呟きながら、私は肺に残る熱っぽい息を吐き出すと、鬱蒼と生い茂る雑木林を見渡した。

山の斜面にそつと聳え立つ無数の木々。

足元には焦げ茶色にそまつた落ち葉がいくつも敷き詰められていて、小さなキノコや樹の根が腐葉土から顔を覗かせていた。

そしてその奥には、枝葉が光を遮り生まれた深い闇。

人をまるで寄せ付けないほど、ほの暗い闇が山の奥に漂い、人の出這入りを拒否しているのが見える。

だが、それだけだった。

「……ない、か」

あつたのは雑木だけ。

僅かな山の生き物、虫や動物の気配すら感じず、腐葉土の上に座りながら、まるで無人の孤島に放り投げだされているような気分になる。

ここには、おそらく『人』しかいないのだろう。

「はあ……」

欲しいモノがここにあると踏んでやってきたのだが、どうやら見当違いだったようで、私は髪を掻きむしる。

（……まあ、そりゃそうか）

——この世界を作っている軸。

そんなものが、おいそれと人が手に入れられるとも私は思えない。できるとしたら、ソレは神の御業。

12の言葉の中に、世界を形成する力がある。

ただ、それだけ重要なファクターが存在するのだとしたら、おそらくこんな山の奥に隠してはいないだろう。

おそらく敵の中に——

（……大島由々子は、ここを出る前に、一体誰とコンタクトを取ったのだろうか）

——答えを知る人物がいるだろう。

それは多分近くに——

ザッザッ……

濡れた枯れ葉を踏みわけ聞こえてくる足音。

樹の幹に寄りかかり空を見上げていた私は、視線を落とすと帽子を脱ぎ昇ってくる人の影に眉をひそめ立ち上がった。

「あ……」

——心臓が跳ねあがる。

日差しに揺れる結った黒髪。

木漏れ日に小奇麗な洋服が良く映え、色白の手には大きめの箱を

持ちながら、小さな女の子が斜面を登ってくる。

息苦しそうに紅い唇から息が漏れ、透き通った黒い瞳が惚ける私を見つめる。

「……コウイチッ」

「柚子さんッ」

私は少し足をもつれさせながら、慌てて斜面を降りると、重たそうに持つ箱を両手に支え、俯く彼女の横顔を覗きこんだ。

苦しげに上下する背中。

日差しに晒したうなじにはうつすらと汗がにじみ、滴が鎖骨へと伝い、少し開いた胸元へと流れていく。

汗に濡れた膨らみの先端が、胸元から覗かせる。

少し赤い――

「……えっち……」

視線に気づいてジトリと恨めしげにこちらを見上げる柚子さん。

「う、ごめんなさい……」

そう言って、私は慌てて箱を持って身体を離して、気まずさに少し首をすくめては申し訳なさに頭を下げる。

柚子さんはそんな畏まる私を視線を外すことなく、舐めまわす様に私の頭の中からつま先まで見つめていた。

少し丸い黒い瞳が私を見つめる――

「……休む」

胸元を抑え、俯きがちに唇から零れるため息。

柚子さんはフラリと山の斜面を歩き始めると、程なくして私のリユックが置いてある太い幹の根元に腰掛け、膝を抱えた。

その姿勢だとスカートの奥から下着が見えるわけで。

そんな私を、柚子さんはずっと見ているわけで。

私は気まずさに少し視線を逸らしながら、彼女の後ろをついていき彼女の隣に座り、少し息苦しげに俯く彼女の横顔を覗きこんだ。

「――でも、どうして……?」

「……村の長が言ったの。……あなたを見張れって」

「村の長ですか？」

「——昨日会ったよね……」

「あの老夫婦。村の長でしたか」

私は脇に箱を置いて、少し息遣いも戻ってきた柚子さんの丸めた背中を摩ると、少し表情を強張らせ彼女に尋ねた。

「彼らは……なんと？」

「——なにも」

「……」

「……私も怪しいって知ってるから。あの二人は何もしゃべろうとしない」

「そうですか……」

「今は、儀式の準備をしてる……。多分今夜から始まると思う……」

「……そう、ですか」

「……ありがとう、摩ってくれて」

仄かに零れるはにかんだ笑顔。

首をすぼめ少し気恥ずかしそうにこちらを見つめる柚子さんに、私は慌てて背中を撫でる手を引つ込めた。

始めてみる笑顔に、私はぎこちない不細工な笑顔しかできず。

「いや……それより、何を持ってきたんですか柚子さんは？」

「お弁当……」

「へ？」

そう言われて、脇に置いた布に包まれた箱を覗きこめば、五十センチ四方の箱は確かに巨大なお弁当箱に見えた。

——食べれる？

二人分としても多めな量を想定し、私はそんな事を考えながら複雑な表情で柚子さんへと振り返ろうとする。

ギョツと手の甲に食い込む小さな手。

っ少しだけ泳ぐ視線。

惚ける私の手をつかみ、柚子さんは幼い顔を少し強張らせ、肌白い頬を赤らめながら、真剣な表情で私に囁く。

「あり合わせのものだけど……そんなにおいしくないし……残り物もあるし……」

「う、うん……」

「——えと、お腹すいた……？」

「はい……」

「うん……食べよ……」

表情が柔らかくなり、ほっとした表情でそう言って少女はぎこちなく笑う私の手を離し柔らかな笑顔を返す。

その笑顔はとても綺麗で、私は首をすぼめ気恥ずかしさに視線を反らした。

——断れないわな。

彼女いない歴が年齢の素人では、そんな技量はなく、私は小さなため息と共に脇に置いた箱を彼女の傍に置いて覆った布を解いた。

そして箸が二つ添えられた蓋を開き、中を覗きこめば三段重ねの重箱があり、柚子さんはそくさとぽかんとする私の前に三つの箱を展開する。

そうしてお箸を私に渡そうとして、少女は最後にハッと黒い瞳を私見つめながら見開く。

「……お水、忘れてきた」

「——重たいですからね……」

「……ごめんなさい」

「いいですよ。僕の方で出す事にしますから」

そう言う私に、柚子さんはお箸を持ちながら途端に目を輝かせ、スツと包み込むようにかざした両手を覗きこむ。

「六月……水の雨」

「むやみに使つては……怒られますか？」

手の中に生まれる水晶のような水滴の球体。

指の間からうつすらと滴る水を見つめながら、柚子さんは惚けた表情を浮かべ、ややあってフルフルと結った黒髪を振った。

そしてきらきとした黒い瞳で私を見つめ、彼女は興奮に少し頬

を赤らめる。

「……きれい……あなたの鼓動が聞こえる」

「一応本業は呪術師です——ノウハウはありますから……これぐらいの事は可能ですよ」

「……コウイチ……」

「え？」

「ありがとう……ここにきてくれて……」

うつすらと目尻に浮かぶ涙。

振り返れば、そこには安堵に表情を綻ばせる幼い少女がいた。

「ありがとう……本当に……」

「——村の儀式を止める、僕の力が役に立てばいいのですが……」

「必ず止められる……必ずこの時間を……あいつらを」

「……アイツら……誰ですか？」

「六の獣……今は眠ってるけど……儀式が始まればすぐに起き上がる……彼の周りにいる連中も」

——老人が言った六人の侍の事だろうか。

じゃあ、彼ら六人を殺す事を望んだ七人目の侍はどこにいったのだろうか。

昨日の老人の話を思い返し、私はぼんやりと木漏れ日の注ぐ木々の枝葉を見上げながらそんな事を考えていた。

クチュリ……

と頬つぺたに押し付けられる暖かい感触。

ハツとなつて視線を落とすと、そこには卵焼きを私の口元に突き出す柚子さんのジトリとした視線があつた。

「え……えと」

「食べて……」

「あ、はいっ。僕も箸を使つて」

「ダメ……もっと見せて……」

「え……」

「あなたが創った水の滴……もっと見ていたい……」

柚子さんは嬉しそうに笑っていた。

——当然と、断るわけにもいかず。

私はつられて笑いながらコクリと頷くと、口を開くままにソツと彼女の差しだした卵焼きを受け入れ口に含んだ。

卵焼きはとても甘かった。

「……おいしいですね。とても」

「もっと食べて……全部食べてほしい」

「お、お腹が破裂しそうです……」

「意気地なし……昨日はあんなにいっぱいしたのに……」

「ゆ、柚子さん……」

「まだ股痛いのに……」

「——はい……すみません」

齒に衣着せぬ物言いに、だらりと大量の汗が吹き上がり、私は顔を引きつらせるままに恐る恐る口を開いた。

途端に膨れ面から笑顔に戻り、柚子さんはそそくさと口に小さく握ったおにぎりを詰め込み、私の顔色を覗きこむ。

じつとり見つめるキョトンとした黒い瞳。

不安と期待に満ちた視線に答えるしかなく、私は水の滴を両手に持ったまま頬を膨らませて口を目一杯に動かした。

少し塩味が効いていて、私はおいしさを噛みしめながら、少し肩をすくめた。

（……この人のお嬢さんは、少し大変だろうな……）

そう考えながら、少しだけ胸が痛んだ。

この痛みは、今までお師匠と修行した時にも感じたことのない痛みだった。

だけど、いやじゃなかった。

もう少しだけ、彼女の傍にいたかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0311ba/>

再掲：闇の奥の奥に―龍神転生異聞録―

2012年1月1日13時49分発行